

41420

教科書文庫

4
810
41-1933
20030 1712

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

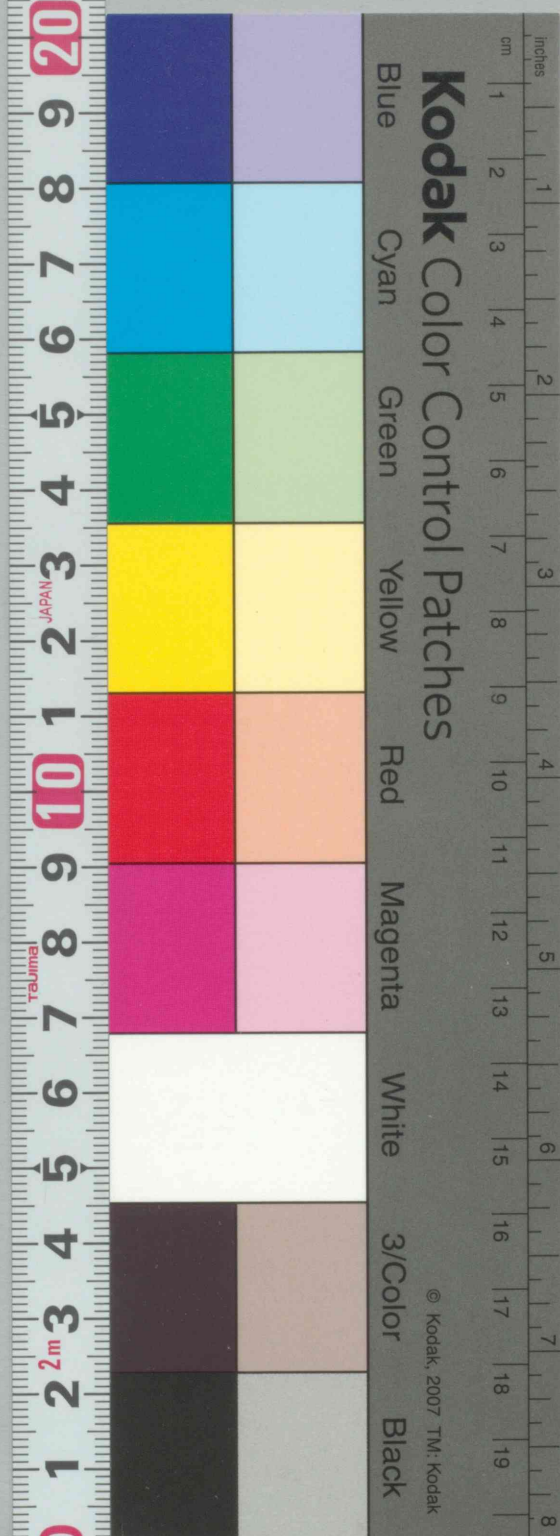


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9

Y019

資料室

SHUDO
MIDDLE
SCHOOL.
O.KOBAYASHI.

新國文讀本

卷三



資料室

3759
4019

文部省檢定 濟
昭和三十八年一月十三日 中學國語教科用
昭和三十八年七月三十日 實業學校國語教科用

吉田彌平編

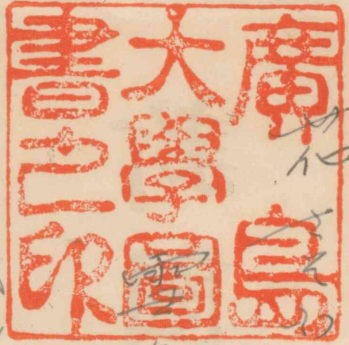
新國文讀本

東京 光風館藏版

卷三



Shudo Middle School boy



は我身有りけり
あらしの庭の
左うで
小りやく



新國文讀本卷三

目次

一	聖天子上にいます	濱口雄幸	一頁
二	わが國		六
三	月雪花	芳賀矢一	八
四	僧都と牝鹿	薄田泣菫	四
五	蒲の花がたみ	瀧澤馬琴	一九
六	佛法僧	高濱虚子	二六
七	山陽の感悟	南條文雄	三三

目次

一

八	進學	室鳩巢	四
九	此の一戦	小笠原長生	五
一〇	榆の樹	櫻井忠温	六
一一	螢	横山桐郎	七
一二	空の膝栗毛	鈴木文史朗	八
一三	空中行進曲	北原白秋	九
一四	樂地	幸田露伴	一〇
一五	町人諭吉	太田正孝	一一
一六	三等の人	福澤諭吉	一二
一七	槍ヶ嶽へ	芥川龍之介	一三
一八	九十九里濱	徳富健次郎	一四

一九	我が幼時	新井白石	一五
二〇	繪葉書通信	永田秀次郎	一六
	天の川		一七
	銅像の都		一八
	牛の鈴		一九
	ヴェニスス月		二〇
	煤けぬもの		二一
二一	蚊	荻原井泉水	二二
二二	烏賊釣舟	相馬御風	二三
二三	氷川清話	勝海舟	二四
二四	南洲遺訓	西郷南洲	二五

落葉ととも眠り去り
 落葉ととも一夜を
 涙流して語り去り
 歸る春を若き日を



新國文讀本 卷三

濱口雄幸

政治家
 財政家
 内閣總理大臣
 高知縣生
 昭和六年薨
 年六十二
 微官
 專賣局長官

一 聖天子上にいます

濱口雄幸

明治天皇御在世の時代、余はなほ微官であつたから、天顔に
 咫尺する機會なく、唯三大節の賜宴に參列して末席から遙
 かに天顔を拜し、優渥にして莊嚴なる勅語に耳を聳てて感
 激に胸を躍らすのであつた。さうして大藏次官として前
 大正天皇の御宇には、余は大正三・四年に大藏次官として前
 同様の次第であつたが、其の後は十年の間、在野の人であつ

昭和四年七月二日
内閣組織の大命を拜し、
内閣の首班となつて以來は、
宮中の御儀式に御側近く座を賜はるばかりでなく、時々内外重要な國務に就いて、何人の侍立もなく天顏に咫尺して天機を奉伺し、言上を爲し、御内奏を申し上げ、

たから、代議士として御大典等稀有の場合に參列するの外皇室の御儀式等に關係はなかつた。同十三年に大藏大臣を拜命し、十五年に内務大臣となつたが、其の時分は申すも畏きことながら、大正天皇には長い間の御不例に涉らせられたので、今上天皇陛下が攝政に御成り遊ばされ、屢所管事務の奏上、其の他御陪食等の機會に御側近く罷出でて優渥なる令旨を賜はることもあつた。

其の時々御下問を辱うし、又有難き御説を賜はることが多かつたのである。余は如何なる場合に如何なることを申し上げ、それに對して如何なる御下問を蒙り、如何なる御説



を賜はつたかといふことは、假令親子兄弟の間と雖も固く洩らすことを慎むべきであると信じて居るのであるが、組閣以來月を

閱するに随つて、近頃餘り健康でない自分は、内外重要な國務蝟集して、これが解決の必ずしも容易ならざるに至つて、平素の修養の足らざる爲か、残念ながら時に或は氣餒ゑ力

弛む様なことがないでもなかつた。かくの如き場合に偶麗しき天顔を拜して優渥なる御誕を承ることがあると、其の度毎に精神凜乎として勇氣百倍、何とも言ふことの出來

暢達

聖天子

漢口雄筆

ない感じが胸中に充満ちて來ることを覺ゆるのである。「聖天子上にいます、大丈夫たるもの當に大いに蹇々匪躬の

筆蹟

暢達

空谷

蹇々匪躬

王臣蹇々タリ躬ノ故ニ匪ズ。(易經)

誠を盡くすべし。生死安んぞ論ずるに足らんや。此の感想は、畏れながら拜謁の度かさなる毎に愈益、其の深度を加へ、其の熾烈を加ふるのである。洵に恐懼感激と申すか、感

奮興起と申すか、此の君の御爲には眞に身命を擲つて盡くし奉らなければならぬ。假令如何なる難局に遭遇しようともこれを突破して君國の爲に報効の誠を致さなければならぬといふことを深く覺悟し、固く決心するを常とするのである。一言にして申せば、かゝる名君を戴ける日本國民は眞に幸福なる國民である。かゝる聖天子の下に大政變理の重任に當れる自分は眞に幸福であり、同時に其の責任は極めて重大である。相共に一致協力して國運の進展に努め、以て建國三千年の歴史をして永遠に其の光輝を發揚せしめなければならぬ。(隨感錄)

一 聖天子上にいます

よみ人しらず
古今集に出てゐる

筑波根
茨城縣常陸國の名山

源實朝
鎌倉第三代の將軍
承久元年(二七九)薨
年二十八

二わが國
明治天皇御製
わが國は神のすゑなり神まつる昔の手ぶりわす
るなよゆめ
よみ人しらず
筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭に
ます蔭はなし
源實朝
山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わが
あらめやも

後醍醐天皇
第九十六代
後宇多天皇の皇子
延元四年(一九九)崩
御壽五十二

後村上天皇
第九十七代
後醍醐天皇の皇子
正平二十三年(三〇三)崩
御壽四十

佐久良東雄

勤王家

常陸の人

櫻田の變に坐して萬

延元年(三五〇)卒死し

た

年五十

八田知紀

歌人

鹿兒島の人

明治六年歿

年七十五

後醍醐天皇御製
世をさまり民安かれと祈るこそ我が身につつきぬ
思なりけれ
後村上天皇御製
九重に今もますみの鏡こそなほ世をてらす光な
りけれ
佐久良東雄
朝日影とよさかのぼる日の本のやまとの國の春
のあけぼの
八田知紀
いくそたびかきにごしても澄みかへる水や御國

の姿なるらむ

三月雪花

芳賀矢一

春ははなみ、夏はすゞみ、秋はつきみ、冬はゆきみ。夏の「み」だけは月雪花三つの眺に關係がないが、夏の月夜のすゞみはまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の農工商人にも、一年間の最大歡樂であり、芋栗を捧げて秋の月を祭る風俗は一般國民的の雅興である。「お月さまいくつ」の俚歌「雪よふれ〜」の童謡、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。月雪花を見て美を感じるのは、歴史的懷舊の念が添ふから

芳賀矢一
國文學者
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
文學博士
越前國福井生
昭和二年薨
年六十一

である。我が國の櫻花は唐人も高麗人も美しいといふにちがひないが、彼等の感ずるところと我が國民の感ずるところとは、大きな逕庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては殆ど



荒木寛月
筆 畝

何の興味をももつてゐない。我等は子供の時から月雪花で教育

されて、大きくなつた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れ

て活動社會を離れることは隱遁者の所爲であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲のやうな霞のやうな花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温雅にし、人を悠揚にするのである。我等日本人は古代から月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月



寺崎廣業筆

る實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温

に叢雲、花に風。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮隆昌幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はよくこの譬喩法を用ひてゐる。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も穢のないものとして、光風霽月などをつゞけて、君子人の眞心に比べられる。月を隠す雲は、この光明を蔽ふものとして、小人邪佞の徒に擬へられる。又雪は皓々として一點の塵なく、冷たくて嚴肅なところから、精神の潔白なことや、節操の渝らないことが聯想される。花

の爛漫たる美しさが忽ち風に散りゆくのを惜しんでは、節義の士が身命を擲つのに譬へる。月や雪や花に靈があつて、これらの徳を備へてゐるやうに感ずるのである。古人



池上花秀筆
がかう感じて來たそのまゝを我等は承けついで、我等もさう感ずるのである。

塙保己一
江戸時代の國學者
文政四年(西元一八二二)卒
年七十六

月雪花を觀賞することの出来る我等は幸福である。盲人でありながら羣書類従一部五百三十卷を編纂上刻した國學者塙保己一は、或時月に對して、

南殿
紫宸殿の一名
その南階の兩側に左
近の櫻右近の橘があ
る

花ならば探りても見んけふの月
といつた。曾て京都に上つた時、折柄御所の南殿の花盛りと聞いて、
目に見ねばせめてなでんの櫻かな
と戲れた。又、東海道を通つて富士の山下を過ぎる時、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬもなか／＼よしや
雪のふじのね

と詠じたといふ。月雪花の眺を擅にすることの出来ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに因んだ傳説をもたない民族も亦人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して古來の文學

を味はひ、國家を思ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出来る。月雪花を通じて、我が國民の歴史は鬚髯として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以て月雪花は見なかつたが、心眼を以て月雪花を眺めたのである。(月雪花)

四 僧都と牝鹿

薄田泣菫

赤ちやけたお山のそこゝに早蕨がによつきりと頭をもち上げようとする暖い春さきの午過ぎだつた。横川の惠心院で、朝からぶつ通しに著作の仕事にいそしんでゐた源僧都は、やゝ疲れを覺えて來たらしく、氣ばらしに几の前を離れて、縁側の障子をあげた。

薄田泣菫

文學者

名は淳介

明治十年岡山縣連島

町生

横川

比叡山の北の嶺

惠心院

源僧が住んでゐて往

生要集などを著した

處

源信

天台宗の高僧

惠心僧都

寛仁元年(六七)寂

年七十六

庭さきに牝鹿が一匹立つてゐるのが僧都の目についた。そこらに青々と萌えだした草の芽を慕つて、こつそり竹垣の破れからでも入つて來たものらしかつた。鹿は柔和さうな眼つきでちらと僧都の顔を見あげたが、格別氣にも留めぬやうで、地べたに軽く息を吹きながら、またも草の芽をかじり出した。
「これ。牝鹿が來て庭草を食べてゐる。早く追出しなさい。」
僧都は庫裏の土間に働いてゐる寺男に呼びかけた。寺男はのつそりとそこへ出て來た。
「うち捨てておかつしやりませ。惜しがる程の草でもご

ざりますまい。」

僧都は言つた。

「いや、そんなつもりで言つたのではない。鹿があまりに人に馴過ぎると、世間には心得のよくないものもあることだから、どんな間違から、あたら^{いのち}生命を落さぬとも限らぬ。それが不便なからぢや。」

「やれ〜。有難いお言葉ぢや。鹿の果報者めが。お上人様はこんなにまでお前をいたはつて下さるのぢや。」
寺男がそこにあつた棒切を取上げて、鹿を追出しにかゝらうとすると、僧都は急にまた何か思ひついたもののやうに、それを呼びとめた。

「いや、わしが思ひちがひをして居つた。そのまゝ打捨てておきなさい。鹿もお山なればこそ、こちらに害心のないのを知つてゐて、あんなに人に馴れてゐるのぢや。そ



源 信 永
井 如 雲
僧 摸 本
都 本

れを無慈悲に追ひやつたところであつては、お山までもさうなのかと、獸の思はくも恥づかしい。」

寺男はそれを聞くと、棒切をそつともとのところにおいて、黙つて庫裏へはいつていつた。僧都も居間に歸つた。鹿はぼり〜と快い齒音を立てて、一心に草を食んでゐた。

暫くすると、僧都はまた縁側へ現れた。手には草餅を一つ持つてゐた。僧都はそれを牝鹿の脚もと近く投げてやつた。鹿は草を食べさせた口で、ちよつと草餅を嗅いだかと思ふと、眼を上げて、縁側に立つてゐる僧都を見た。そして自分がいつの間にこんな人近くやつて来たかを疑ふものやうに、そこらを見廻してゐたが、急に氣がついたやうに竹垣の破れを飛越えて、逸散に外へ逃げだして往つた。僧都はその姿が物蔭に隠れて見えなくなるまでじつと見送つてゐたが、やがて口のなかでこんな事をつぶやいた。「とう／＼往つてしまつた。わしがさかしらぶつて教へ

ずとも、自分の生命を護るのに必要なものは、それ／＼授つてゐるのぢや。――さつきは、唯もう一途に腹がすいてゐたものらしいて。

それでも僧都は、自分の心のどこかに、踏荒された庭土の上のところがつてゐる草餅のやうに、寂しいあるものが唯一つ、小さく残されてゐるのを感じないわけにはいかなかつた。

(樹下石上)

五 蒲の花がたみ

瀧澤馬琴

蒲生修靜、山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時小澤蘆庵は古學を好みて、萬葉風の詠歌に

瀧澤馬琴 江戸後期の小説家 江戸の人 嘉永元年(二五〇)歿 年八十二
 蒲生修靜 勤王家 名は秀實 字は君平 通稱は伊三郎 下野宇都宮の人 文化十年(二四三)卒 年四十六
 小澤蘆庵 江戸後期の歌人 尾張の人で京都に住んでゐた 享和元年(二四六)歿 年七十九

名高く世をすねたる隱逸なりと豫て傳へ聞きしかば、彼が助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。小澤が家僕出迎へて、「いづこより」と問ふ。言



蒲栗 生原 修信 静筆

寄る由もなきまゝに、修静まづ伴りて、某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼べるゝ者なり。琴を好み候へども、田舎には良き師なし。主人の翁は琴の妙手にてお

東野
東國なる下野の國

はするよし、東野の果までも隠れなし。これにより、御弟子にならまくほりして、はるゝと來つるにて候。といふ。其の僕心を得て奥に赴き、云々と告げにけん、蘆庵の聲と覺

しくて、いと高く、あな無益にも訪はるゝものかな。汝出でてしか答へよ、主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中にだに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴らしたりけれど、あちこちの人に知られて、彼に聞かせよ、此に教へよといはるゝがうるさければ、近頃打擡きて薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず。他に行きて求めたまへ。と言へ。といふ聲の襖一重を隔ててぞ聞えける。

修静、僕が云々といふをも待たず、更におし返して言ふ、翁の御答はこゝにてつばらに漏聞きたり。某なほ一言あり。願はくは枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しか

じかの志願あれば、しばし江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと其の氣質の俗ならぬとは、豫て傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、琴を學ばんために來りつ。とは言ひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虚言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許されて對面せられなば、肝膽を吐き志願を告げて翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへといふ。蘆庵これを漏聞きて、「さりとて思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずば、くやしきことあらん。此方へと申せ」とて、やが

その上、ごまごま
入つてせんや
お返り下さつても
山しも不痛い

て面をあはせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思ひ起せる志願の由を説きしめし、山陵志著述のために古き御陵を尋ねんとて旅寢をしつ



小 蘆庵も只管感歎して、足下は得難き學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、こ

求したまへ。とて、又他事もなくもてなしけり。

これによりて、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせけ

山陵志 二卷 蒲生君平著 歴代の山陵を國わけにして考證した漢文の書

子二つの頃
午前〇時半頃
子 午前〇時
丑 午前二時
寅 午前四時
卯 午前六時
辰 午前八時
巳 午前十時
午 午後十二時
未 午後二時
申 午後四時
酉 午後六時
戌 午後八時
亥 午後十時

れば、修靜、老人の心づかひ心苦し。とて辭めども、従はず。「こ
れらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦か
かる奇人に宿することの歡ばしく、且は足下の疲勞を慰め
て、國のために力を盡くす人の助にならんとてなり。必ず
いなみ給ふな。とて、後々までも、しかしてけり。
かゝりし程に、修靜、ある夜更闌けて、子二つの頃歸りしかど
も、蘆庵は寝ねず待ちて居り。例の如く湯あみさせ、飯を
すゝめて、さていふやう、「吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に
物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕を休らは
せん」とて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古
陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草食うてか。

老人に物を思はせ給ふこと心得難し。とつぶやきけり。

修靜聞きて容を改め、翁の恨理なり。吾が非を飾るにあら

ねども、更闌けたるは聊か故あり。懺悔の爲に笑に供へん。

けふはそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで

尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こ

こに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて

罵るやう、「梟臣尊氏、なほ靈あらば、今言ふことを確に聞け。

汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守

りて毒を後世に流ししより五百十數年、干戈をさまらず、國

の舊典もこれが爲に焼け亡び、王室もまたこれに因りて卑

しく、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾らにさへあくま

等持院
京都市右京區衣笠山
の南麓にある臨濟宗
の寺

建武中興
後醍醐天皇が北條氏
を滅されて政權の一
時皇室に復したること

靈山
京都市東山區圓山公
園の奥の山
四條の末に當る
長嘯子
木下勝俊
豐臣秀吉の夫人北政
所の兄木下家定の長
子
歌人
慶安二年(三〇九)卒
年八十一

で物を思はするは皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし。』
とて、杖もてあたりの石を思のまゝに打毆きつ。かくて寺
門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に
立寄り、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡くしたり。さて
酒屋を出でしかど、酔うて足も定まらず、このまゝにて歸り
行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思ひて、
株に尻をかけしより、熟睡やしけん、時移りて驚き覺むれば、
更闌けたり。」と語る。
蘆庵ふきいだして、からくとうちわらひ、さてもく、世の
中には似たる馬鹿者もあるものかな。われら亦往ぬる年、
ある日、靈山の邊に逍遙して長嘯子の墓をよぎりし時、流石

鳥居元忠
徳川家康の家臣
慶長五年(三〇六)伏見
城で戦死した
年六十二

に宿恨なきにあらねば、行きもえやらす、にらまへて、長嘯子、
不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは
豊太閤の外族とて、位高く、且采地も廣かるに、心ざま武士に
似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て、鬼胎を抱き、鳥居元忠を
捨殺にせしは不義なり。事平ぎて罪を蒙り、わづかに命を
助けられしを幸にして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人顔
して、えせ歌多く詠じたる、所謂一盲衆盲を引きしより、歌の調わ
ろくなりて、今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあら
ずや。冥罰かくの如くならん。」と罵りながら、杖をあげてあ
たりの石を毆きたる事ありけり。こは能く似たるにあら
ずや。」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹をかへたり

とぞ。(兎園小説)

高濱虚子

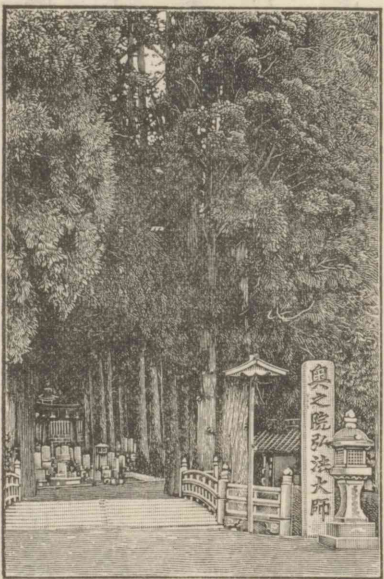
俳人
小説家
名は清
明治七年愛媛縣松山
生

六 佛法僧

高濱虚子

夕飯の済んだ後、今夜奥の院に往つて佛法僧の啼聲を聞いて来るから、提燈を貸してくれたまへ。と給仕の小僧さんにいふと、畏まりました。と、小僧さんは笑ひながら、膳を下げて行つたが、いくら待つても来ない。一時間もたつてから、本當に往くのですか。と聞きに来る。「勿論本當に往くさ。」と答へると、途中で何か出ますよ。といふ。「何が出る。猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽霊が出ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの古い墓ばかりが目についたが、成程

中には新墓もあらう。「新墓の幽霊位何でもない。」と、元氣な事をいつてやる。小僧さんは又薄氣味の悪い、いやな笑ひ



高野山私法大師院

やうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋のついてゐる大きな提燈を持つて来る。さうして「幽霊

の外に野衾も出るさうですから、氣をおつけなさい。若し二時間もたつてお歸りが無かつたら、お迎へに行きます。と、しやれた事をいふ。小僧さん自身に提燈をつけてくれて、表門を締めてしまつ



野衾
むさしび

土蜘蛛
能の土蜘蛛によつて
仕組んだ芝居で蜘蛛
の精を源頼光が退治
するところ



たから裏口から御案内しませうと先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに、馬鹿に脊が低い。それが大きな提燈をさげてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ。下駄をはいて臺所の横にまはる。廣い臺所には燈が一つともつてゐるばかりだ。暗やみの中に、二三人の小僧さんが笑ひながら我等を見送つてゐる。それが提燈の光で、纔かに見える。がりくくくと音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩乗な裏門のくぐり戸を小僧さんが先に立つてあけてくれた時、鐵の鎖の戸に軋る音であつた。小僧さんが突きだす提燈を受取りながら、友と二人で表に出る。表は暗い。

星はあるが、纔かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提燈をたよりに、其の白い土塀に沿うて、表通の奥の院道に出る。門前の數珠屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木が、襖の如く連なつてゐる。其の左右の襖で立てきつた中に、帯のやうに幅の狭い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。しかも其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提燈の光で、纔かに足許を探つて歩く。晝間は氣がつかかなかつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。

雨月物語
五卷
上田秋成著
擬古文で書いた短篇
の怪談物語集

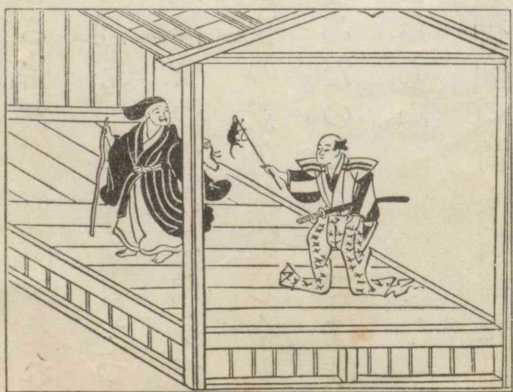
其の木の根は左右に延びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集つてゐる。友は提燈をさし上げて、其の杉の幹に押しつけるやうにして歩く。友が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大ききのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。

寐鳥のたつ音がする。見ると、提燈の上から圓筒の如く圓い光が空中に射出されて、それが高いく、杉の梢をさまよつてゐる。寐鳥が泡を食ふのも尤もだ。

歩きながら友に「雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつてゐる。どこやら心細くなる。かういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見え

釣狐
狂言の曲の名
一名こんくわい
白藏主
狐を釣る獵師の叔父
に當る坊主

なくなる。今度は杉木立のずつと奥に薄ぼんやり明るいものが見える。何であらうかと氣にしなから行くと、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がかゝつてゐる。向ふからふらふと提燈が一つ来る。急に見えなくなるのは杉の木に隠れるのであらう。すぐまた現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見ると、釣狐の狂言に出る白藏主に似てゐる。行手に燈籠らしい燈が三つともつてゐる。近寄つて見る



狐 釣

玉川
六玉川の一
高野の玉川

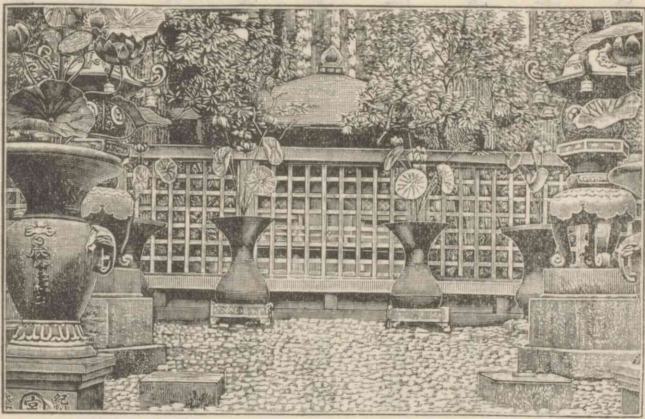
と御廟の橋だ。友が橋の上から提燈をつり下げて水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちらく〜と流れてゐる。燈籠堂はもうすぐ其處に在る筈だが、眞暗でそれらしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すっかり四周の蔀を下して、寂然として寢靜まつてゐるやうだ。數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、寂しくも嚴かであらうと思つて、樂しみにしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に沿うて御廟の前に出る。御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六箇の小さい釣燈籠がともつてゐる。其の光で纔かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立とが見える。

此の線香立には、晝間見た時は煙が雲の如く渦卷いて居つた。其の煙の中に數珠を燻べたり、鈴を燻べたりしてゐた信者が今は一人も見當らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も昇つて居らぬ。提燈を其の中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に線香の燃え滓の赤い紙が四五本残骸を留めて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然として靜まり返つたところを



高野山燈籠堂

見ると、愈、偉大な線香立である。



法隆寺
法相宗の巨刹
奈良七大寺の一
聖徳太子御建立

高野山御廟

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて縁に置かれた提燈の燈が心細さうに瞬いてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はない筈だが、不思議だと思ふ。其の鉦の音に聞きほれてゐると、忽ち近い木の梢でけたまほしい啼聲が

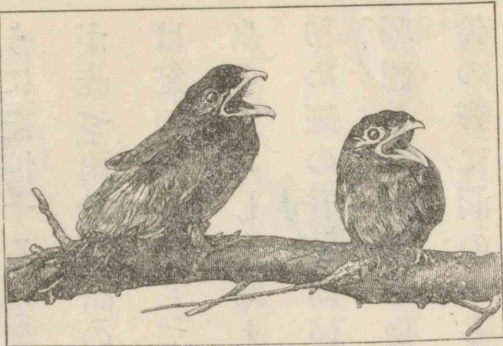
起る。何でも朽木を引裂くやうな、殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。

鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、今の啼聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をしたやつで、忽ち空中から落下し來つて提燈をさらつて行くやうなことはあるまいかと氣になる。氣のせめか、提燈の燈は一層心細さうに瞬いてゐる。

小さい咳拂が聞える。おやと思ふうちに又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子にちよつ

とした明りがある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、すぐに番人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて、「もし〜」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「一寸伺ひますが、あのおそろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です」といふ。「へい、何といふ獸です」と聞くと、「野衾」といふて、蝙蝠のやうな、鼯のやうな、妙な恰好をした獸です」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處ですか」と聞く。番人は一寸黙つてゐたが、「あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です」といふ。

鉦の音かと思つてゐたのが鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれを聴くために來た佛法僧であつたのは



愈意外であつた。「あれが佛法僧ですか」といつたまゝ、暫く無言で、二人とも佛耳を傾けた。やはり、かん、かん、かん、かん、法んと鉦の音のやうな響に聞える。唯僧さう思つて耳を澄ますと、かんと響く前に、ぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてから、かんと高く牙えた音が響く。つまり、ぶつかん、ぶつかんと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物に文字通り佛法僧と鳴くとあるが、

「雨月物語」には佛法といふ字にわざ／＼「ぶつばん」と假名が振つてあつて、ぶつばん、ぶつばんと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲はぶつかん、ぶつかんと聞えるが、先づ「雨月物語」のぶつばんに近いやうだ。妙なもので、初は鉦の音と信じてみたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。

初め、鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を聯想したが、生き物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に潤のあることに氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならぬと鳴かんのに、今晚は宵の口から頻に鳴いてゐた」といふ。さういふ内も絶えずぶつかん、ぶつか

んと聞える。普通の鳥とは餘程違つてゐる。法の御山の靈鳥として恥づかしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌がこれをもてはやしたのも尤もだ。私は嘗て高野の山の靈山であることは奥の院道の杉並木で證據立てられるといつたが、否々、杉は物かは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。

見ると、遙か彼方の縁に置かれた提燈の燈も今は靜かにもつてゐる。

番人は寂しい燈籠堂の夜陰に偶、話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ／＼話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも此の燈籠堂で焚く油は夥しいことで、月に一石

三月二十一日
弘法大師が承和二年
(四七五)三月二十一日
に入寂したその忌日

から二石の間を往來してゐる。殊に三月二十一日の御影
供の時は、一石の油を焚くといふ事や、貧の一燈の燈は信者
の所望によつて線香に移してやる、それを北海道や九州あ
たりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので、大阪
あたりから復引返して來る人もあるといふ事などは面白
かつた。

ふと氣がつくと、佛法僧はいつの間にもやら鳴かぬやうにな
つてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな啼聲をする。
歸途に着く。

御廟の橋にかゝつた時、友が「また鳴く」といふ。
向ふの墓原を縫ふやうに提燈が一つ來る。女が三人に男

が一人、南無大師遍照金剛と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

(十五代將軍)

七 山陽の感悟

南條文雄

南條文雄
佛教學者
文學博士
越前國生
昭和二年卒
年七十九
山國谷
大分縣下毛郡にある
溪谷
耶馬溪
大舎
畫僧
嘉永三年(三〇)寂
年七十八
賴山陽
儒者
詩人
名は兼
通稱は久太郎
安藝の人
天保三年(四三)卒
年五十三

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大舎
は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人墨客と交
り、別して賴山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十九
の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華
上人の手引であつた。山陽が耶馬溪、山天下無と激賞して
から、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたので
ある。

9
1/15
2/15

八代 熊本縣八代郡八代町
法海 眞宗の僧
號は橘州
肥後の人
天保五年(西九)寂
年六十七

當時、肥後國八代の光徳寺に易行院法海といふ、學徳共に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次豫て雲華上人よ



山 陽

り得た紹介を以て遙々と法海師を尋ね行き、頼久太郎、老師の高名を慕うてお尋ね申した。お取次をお願ひ申すと申し入れた。折柄机の前に端坐して讀經してゐた老師は、やをら起つて山陽に面會した。山陽は初見の挨拶をすませてから、自分の書いた「楠公傳」の稿本をその懷から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふ者、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間唯の一度も歸省して親の安否を尋ねようとはせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。」

この時、法海師の鋭い眼光は山陽の面上を電のやうに射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師は更に語を繼いで、

「忠臣は必ず孝子の門に出づ」とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者が忠臣の傳を書くとは、大それた事では

忠臣は 忠臣ヲ求ムルニハ、
必ず孝子ノ門ニ於テ
ス。(後漢書)

ないか。楠公の靈若し知るあらば果して何と思はれる
であらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。

老師はかく言ふや否やずつと起つて元の座に歸り、靜かに
讀經すること初のごとくであつた。

程經て、やつと頭を擧げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて

鞭聲肅々夜河ヲ過ル
大牙遠恨十年磨一劍流星光
底長蛇ヲ失ス

流れる
の氣
がつい

た。今は取りつく島もない。老師の前に默禮して寺門
を出た。

「さすが一宗の學頭偉い和尚だ。」

筆蹟

鞭聲肅々夜河ヲ過ル
曉ニ看ル千軍ノ大牙
ヲ擁スルヲ。遺恨十
年一劍ヲ磨ク。流星
光底長蛇ヲ失ス。
機山公ノ像ニ題ス
山陽外史

陽明學

明の大儒王陽明の唱
へた知行合一の學說

夏日の日
冬日の日

趙衰ハ冬日ノ日ナ
リ。趙盾ハ夏日ノ日
ナリ。(左傳)
その註に「冬日ハ愛
ス可ク、夏日ハ畏ル
可シ。」とある

これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の腹の底から
搾り出された感歎の辭であつた。

それから歸つて、雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何
にも我が意を得たといはんばかりに、莞爾として言つた。

「さうか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學
をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそれを實行
すべき時である。」

山陽は覺えず立上つて、法海師は夏日の日、上人は冬日の日

だ。といふや否や、早々行李をとくのへ、翌日未明に發足して、

老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。

山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎

へ、吉野や伊勢にお供して孝養を盡くした。山陽が、その後、
至孝の子として數々の美談を遺したのも、畢竟兩師の言を
虚心に受入れたためである。(修養錄)

八進學

室鳩巢

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日
に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は
恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々とし
て勉めて息まざるにありぬべし。若し悠々として日を涉
りなば、年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔
ゆとも、何の益かあるべき。即ち今余が身の上にて候。さ

室鳩巢
江戸幕府の儒者
名は直清
享保十九年(三九四)辛
年七十七

古詩
漢代の詩
作者未詳

陶淵明
晉の隱逸
名は潛

朱文公
宋の儒者
名は熹

れば、古詩にも、
少壯ニシテ努力セザレバ、老大徒ニ傷悲セン。
といひ、陶淵明も、



盛年ハ重ネテ來ラズ。
室 一日ハ再ビ晨ナリ難シ。
鳩 時ニ及ビテ當ニ勉勵スベシ。
巢 歲月ハ人ヲ待タズ。

じうすとぞ見ゆる。此等の詩句、時々吟詠して勇進の氣を
振ひ起すべし。又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、
謂フコト勿レ、今日學バズトモ來日アリト。

陶侃
晉の名將
淵明の曾祖父

曩祖
陶侃

謂フコト勿レ、今年學バズトモ來年アリト。
日月逝キヌ、歳我ト延ビズ。
嗚呼老イタリ、是誰ノ愆ゾヤ。
言簡にして意も明白なり。折節打誦じて自ら警むべし。
それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。
大禹ハ聖人ナリ、乃チ寸陰ヲ惜シム。衆人ニ至リテハ當
ニ分陰ヲ惜シムベシ。豈佚遊荒廢、生キテ時ニ益無ク、死
シテ後ニ聞ユルナカルベケンヤ。是、自ラ棄ツルナリ。
といへるこそ、學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへ
る淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思はる。凡そ人と
生れて、學に志ありといふきは、の生きて時に益なく、死して

紹鷗
織田信長の茶道の師
武野仲村の號
和泉國堺生
弘治元年(三三)歿
年未詳

利休
豊臣太閤の茶道の師
千宗易の號
和泉國堺生
紹鷗の門人
天正十九年(三三)切
腹
年七十一

後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ちはてんは、いと口惜
しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて
自ら激勵して、日夜勤勉せらるべし。
但し、學は勇進を喜ぶといへども、又急迫なるを嫌ふ。とか
く一生こゝを離れぬことなれば、急迫にして求むべきにあ
らず。たゞ懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久
しうして自ら進益あるべし。
余昔加賀にありし時、士族の中に紹鷗、利休が風流を慕ひて、
茶湯を好む者あり。江戸に行役する時、道中茶具を持して、
逆旅にても釜をかけ、炭をおきて樂しみとしけるを、同行の
人見て、「いかにすけばとて、道中にてはやめよかし。」といへば、

小笠原長生
海軍中將
宮中顧問官
子爵

慶應三年(三三)舊唐
津藩主の家に生れた

東郷大將
東郷平八郎
元帥

海軍大將
大勳位
功一級
伯爵
弘化四年(三〇)鹿兒
島生

秋山參謀
海軍少佐秋山眞之
後海軍中將
一時五十五分

明治三十八年五月二
十七日の

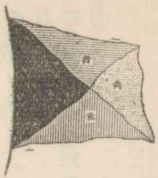
その人いふは、道中とて一生の外にあらばこそ。これも一
生の日數の内なれば、わが茶湯をする日に非ずといふこと
なし。家にあると何ぞ異ならん。とて、その後もやめざりき。
學者の道に志すも、此の人の茶湯を好むが如くなるべし。

(駭臺雜話)

九 此の一戦

敵の全勢力が悉く出現したのを眺めた東郷大將は、いと満
足げに微笑を浮べ、好位置を占める準備として先づ西方に
變針せしめ、敵を左舷正横に望んで暫時進航した。その時
大將は秋山參謀を麾き、何事をか命ずると思ふ間に、一時五

四色の彩旗



那須與市
名は宗高
弓の名手
屋島の戦源義經の命
により平氏の兵船の
竿頭に挿んだ扇を射
落して盛名を馳せた

十五分三笠の檣上に四色の彩旗が翻り、千載不朽の信號は
示された。曰く、

皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ。

全艦隊幾萬の將卒、一齊にこれを仰いで肅然一語無く、中に
は感極つて落涙した者もあつた。道理よ。那須與市の琵琶
歌にさへ泣いた勇士の例もある。まして東郷大將の胸
中を想はば、何人か涙なしにこの信號を讀み得ようぞ。撃
滅の奉答を果して宸襟を安んじ奉るは誰が任ぞ。御國の
安危を決せしめるは誰が任ぞ。國民が十年臥薪嘗膽の甲
斐あらしめるは誰が任ぞ。皇國海軍の名譽を擧ぐるは誰
が任ぞ。この重大責任が悉く我、東郷の雙肩に懸れりと覺

悟し來るとき、東郷も肉體も、小我も、妄念も、凡てが絶滅せられて、唯そこには人格化せられた純忠至誠があるのみだ。これを客觀して觀音力といふ。大火も焼き得ず、巨弾も避ける。……

「長官！もうぢきに砲戦が始りませう。司令塔内にははいり下さいませんか。」

秋山參謀は面を正して大將にかう勧めた。

「司令塔内は外方が見にくうていかん。こゝで十分ぢや。」

なか／＼以て承諾の氣色はない。

「いや、多少は見にくいかも存じませんが、こゝは危険です、

永田
聯合艦隊副官海軍中
佐永田泰次郎
後海軍中將

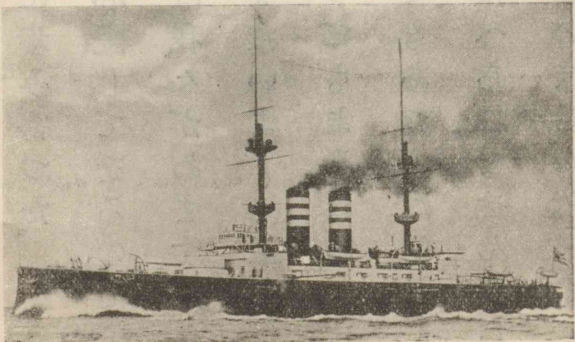
是非おはいり願ひます。長官に萬一の事があつては、取還しがつきません。なあ永田！」

平素より大將の容易に動かぬを知悉してゐる秋山參謀は、暗に永田副官の援助をも要求した。

「さうですとも。秋山參謀の申す通りですから、おはいりになつてはいかゞですか。大して見にくいこともございますまい。」

「どうも内は萬事不便ぢや。わしはこゝでいゝ。」

いよ／＼以て應じられさうもないので、長官の身を案じる



軍艦三笠

加藤參謀長
海軍少將加藤友三郎
後元帥
海軍大將
内閣總理大臣
子爵

事の深い秋山參謀は氣が氣でない。つひに加藤參謀長に目くばせして、三面攻撃の方策に出ようとした。それとさつた參謀長は靜かに大將のそばに歩み寄つた。

「いかゞです、長官！皆もあんなに心配してをるのですから、おはいりになつては、こゝには我々がゐますから、御不便はおかけ申しません。若しまたいよく工合が悪かつたら、その時お出ましになつてもよろしいでせう。秋山の申す通り、長官に萬一の事でもあつてはそれこそ大事です。少々見にくい位には換へられませんか、こゝは一つ我々の切願をお納れ下さいませんか。」

かう皆から勧められては、いかな大將でも、むげに拒絶する

譯にいくまい、今度は定めし承知されるだらうと思つてゐると、さすがに感謝の色は動いたが、眞心を面に浮べて、

「わしを案じて下さる御親切は忝いし、わしもさう無暗と強情を張るのではござらんが、運命は別なもので、どこにゐてもやられる時はやられるよ。第一、わしはもう六十にもならうといふのぢやから、一命を捨てて御奉公が出来れば、この上の本望はない。貴君方は前途遼遠で、永く御奉公せにやならぬ身體ぢやから、わしよりも貴君方ははられるのが當然ぢや。それに皆が一箇所に集合してゐるのは不得策ぢやによつて、交代しておはいりなさい。さうして身を全うして、今後益々君國のため盡くされ

ん事を希望します。」

平素の寡言にも似ず雄辯滔々と述べられたので、それでもとは参謀長等は勧めかね、反つて大將の責任觀念と厚情とに感激し、とうとう黙して大將の爲すがまゝに任せてしまつた。すると、どうだらう、それは開戦後十分程たつての話であるが、一大弾片が司令塔内を襲ひ、その内にゐた飯田参謀及び下士卒二名を傷つけた。この時若し東郷大將がそこにゐられたならと考へると、思はず慄然とするではないか。大將が運命は別だといはれたのに想到すると、何だかそれを豫知してをられたやうにも思はれて、神祕の閃きを感じぬ譯にいかなくなる。

飯田参謀
聯合艦隊参謀海軍少佐
佐飯田久恆
後海軍中將

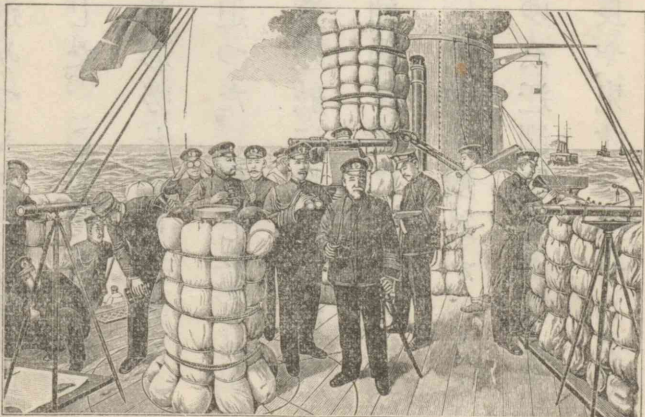
第一・第二戦隊を率ゐて西方に進みつゝあつた東郷大將は、二時二分更に南西微南に變針した。こゝにおいて彼我兩隊は縦陣を以て遙かに相對する形勢となり、次第々々に接近し、乾坤震動するも束の間に迫つた。併し若しこのまゝにして直進するならば、互に敵を左舷に見る反航戦となり、利害共に相均しい戦勢を以て通過するに至るのだから、無難ではあるが、平凡なやり方だ。直進か、變針か。この一舉が海戦全般に大關係を有するゆゑ迂濶には出來ない。將來名宰相と謳はるゝ加藤参謀長や、鬼才と稱せらるゝ秋山参謀、さては戦術に一見識を具へた伊地知艦長など稀有の

伊地知艦長
三等艦長海軍大佐伊地知彦次郎
後海軍中將

安保砲術長
海軍少佐安保清種
後海軍大將
海軍軍令部次長
海軍大臣
軍事參議官
男爵

秀才ぞろひだけに、論戰容易に決しない。安保砲術長はその時の光景を後にかう話してゐる。

「その利那の三笠艦上に於ける光景は何ともいへぬ一種莊嚴の氣に打たるゝものであつた。當日は波も高く、風もなか〜強い。煤煙と濛氣との間に堂々と進み來る敵影を見て、さあどういふ風にこれから戰をしようかといふことを決する、眞に危機



三笠艦の上の東郷大將
東條 鈺 太郎 筆

苗頭
左右の彈着修正量

一髮の瞬時である。自分は砲術長として最上艦橋にあつて、各砲臺に對し距離苗頭を號令するに就いて、風向風力等をも加味し、適量の默算に餘念なかつたが、第一右舷戰鬪をやるのか、左舷戰鬪をやるのかといふことは砲臺に最初の號令を下す上に非常に關係が深いのであつて、自分は至大の注意を以て事の成行を見てゐたのである。當日は濛氣の關係もあり、彼我艦隊の距離は意外に早く近接して、既に八千五百米に近づいた。もう何れとか決定されなければならぬ時機が來たと思つてゐると、加藤參謀長は突然「砲術長！君一つ距離を測つてくれ。しつかりしたところを。」と叫ばれたので、自分は直に測距機

スウォーロフ
敵の司令官
ロジ
エストウエンス
Suwaroff
キー中將
座乗の
旗艦

について測つて見ると、敵の先頭にある旗艦スウォーロフは正に八千米。もう今こそ何れの舷で戦ふかを定めてもらはなければならぬから、自分は「もう八千になりました。どちらの舷で戦をなさるのですか。」と大聲で報じた。

その途端！。それまで幕僚等の議論に耳をも貸さずして一意敵の態度に着目してゐた東郷大將は、突然右手を眞直に挙げ、さつと左舷の方に一振して、きつと參謀長を見返つた。參謀長はその意を覺り、

「艦長！ 取舵一杯！」

と叫んだ。

取舵
左舷へ回轉すること

「え、取舵にですか。」

「さうだ、取舵だ。」

いひも終らず大將に向ひ、

「長官！。取舵に致します。」

打領いた大將は會心の微笑を浮べ、依然として炯々たる眼光に敵の動靜を看守つた。この一斷、これ實に敵を殲滅するの素因を成したもので、延いては強敵をして叩頭して和を乞はしめ、世界に於ける皇國の地位をも躍進せしむるに至つたのだ。

取舵の一令に連れ、三笠は急にその艦首を左方に振向けて東北東に變針し、以て斜に敵の先頭を壓迫しようとした。

この時敵は北東微北に進みつゝあつたが、三笠の變針を見るや否や、撃つは今ぞと、スウォーローフ眞先に火蓋を切り、數艦一齊にこれに倣つて猛烈な砲火を三笠に浴びせた。爆煙遽に渦巻き渡つて、巨彈縦横に迸り、三笠は旋回を了らぬうちに早くも數彈を被つて、血汐は既に韓紅を甲板に鏤めた。逸りきつたる我が將卒は、應戰を今かくと待ちわびて、しばしば最上甲板を仰ぎ見るけれども、幕僚も艦長も敵彈の飛來を知らざるものの如く、彼も黙し是も黙して、なほ敵彈の荒るゝに委せるうち、時計針は二時十分を指した。

「スウォーローフ六千五百。」

この報告を聞いた刹那、艦長の眼はぎらりと輝いて、砲術長にめくばせした。その時早し、我が十餘門の大砲は、始めて敵の旗艦スウォーローフに齊射を加へて轟々たる響を四邊に傳へた。(撃滅)

櫻井忠温

陸軍少將

明治十二年愛媛縣松山生

榆



昔

明治三十七八年戰役の當時

一〇 榆の樹

櫻井忠温

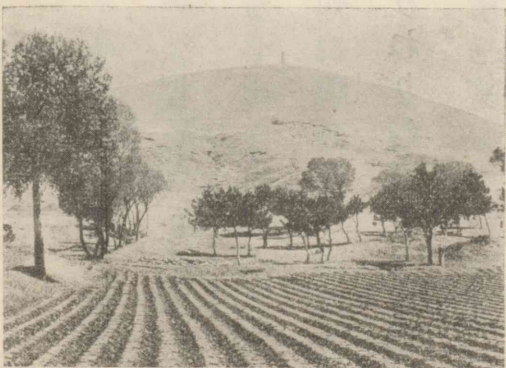
榆の樹——それは私に懐かしいものであつた。

廣い野原の中に——緒い土のうねりの中に、私を喜ばしたものは榆の樹であつた。

昔戰場にあつた日、私に心を寄せてくれたものは榆の樹であつた。その葉の茂る頃も、その落ちる頃も、私の心をひき

つけてくれたものは、その榆の樹であつた。春が訪れると、長い手をなよ／＼と伸ばした。そして淡緑色の櫻の葉形を行儀よく並べて、柳のやうにしなだれた。

澤山の枝が傘のやうに八方に広がつた。樹の下からも、柔かい枝がすくすくと伸びあがつた。そして、樹の幹が隠れる程に茂つた。



満洲の榆の樹

私は、戦に疲れてはその樹の下に體を休めた。眠りながら、遠い／＼空に夢が飛んで行つた。暑い日が葉の間を漏れて來た。小魚こさかなのやうに腹を翻しながら涼しい風を持つて來てくれた。

幾人か寄つては、その樹の下でいくさ話に耽つた。どこからか汲んで來た泥水を分けあつて飲んだりした。

そして、又そこから出ては戦つた。傷ついたものは又そこへ戻つて來た。血を浴びた體を横たへながら呻き續けた。そのまゝ死んで行つたものもあつた。

榆は此の人たちの上に悲しみながら、その死體に柔かい手を廣げた。傷ついて歸るものと、新に戦場に出るものとが此の樹の下で別れた。

葉が紫色にかはる頃には、そろ／＼寒い風が北の荒原から見舞つて來た。そして瞬く間に「皆さんさやうなら」といつたやうに、あつけなく別れて行つた。

葉が逃げてゆくと、枝は弦の切れたやうにはねあがつて、折れさうな手を上へさし伸べた。

灰色の枝や幹は、寒い風にさらされながら、その下に憩ふ人の上に寂しい瞳をなげた。

ある時は一夜のうちに氷の花を粧うて、それが櫻のやうに輝かしく光つた。——枝といふ枝に露が凍りついて、綿帽子をかむつたやうに眞白になるのであつた。

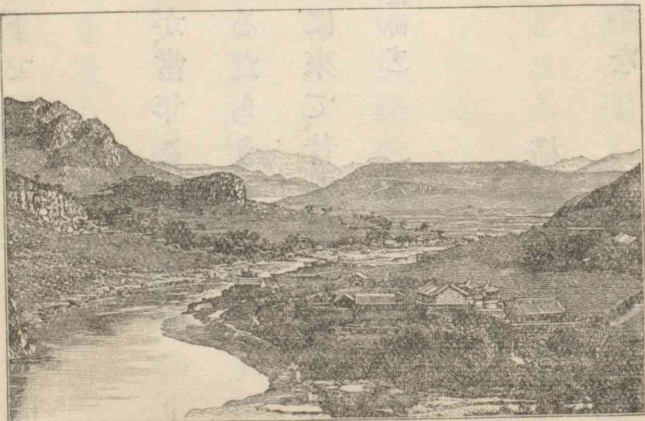
戰場から離れて後も、二つの冬を滿洲で過したことのある

私は、なよく／＼した若葉と共に、氷の花の楡の美しさを忘れることが出來ない。

汽車が釣魚臺あたりの山間へ入つた時、手毬のやうな寄生木の鈴生すずなまに生つてゐるのを見て、楡への懐かしさがたまらなくこみ上げて來た。そして「滿洲へ來た」といふよりは「滿洲へ歸つた」といふやうな心持になつた。

「あのあたりが奉天會戰の第一攻撃正面です」と誰かが私に話しかけたので、その方を見ると、

釣魚臺
安奉線の橋頭から分水嶺に至る細河の谿谷に臨む臺地



釣魚臺

そこには榆の並樹が柵を並べたやうに並んでゐるのが眼についた。そして當年この樹の下で戦つた人たちの面影が眼に映るのであつた。

再び滿洲に戦争がめぐつて來たが、當年この榆の樹の下で戦つた人が、今日幾人生残つてゐるだらう。

戦場生残りの私は、かうしてこゝに來て、昔を思つては、たゞ涙ぐまれて來るのである。(銃劔は耕す)

横山桐郎

昆蟲學者

農林省蠶業試驗場技

師

農學博士

東京市生

昭和七年卒

年三十九

一茶

俳人

小林彌太郎

俳諧寺一茶はその號

信濃の人

文政十年(一四二七)歿

年六十五

螢

横山桐郎

一茶

とらるゝも口ゆゑならで螢かな
ばさりくゝと草をたゞく音が、今夜も塀の向ふの川岸から

響いて來た。それに續いて、光つた、光つた。といふ腕白小僧の甲高い聲が聞えた。私はその聲を聞くと、あゝ又つかまへられて、はかない命をとられてしまふのかと、さびしい氣持になつた。

私の假寓の小さな前栽の前の狭い道路を隔てて、小川が流れてゐる。川といふよりも寧ろ溝といつた方がふさはしいかも知れない。それでも幅は三米、深さは五米ばかりもあらうか。兩岸は崖のやうに切りたち、雜草や灌木が生ひしげり、ちよつと谷間のやうな趣をなしてゐる。

五月に入ると、此の川のほとりに僅かばかりの螢が出る。全體を集めても、二百匹そこゝ位だらう。これだけが五

月の半ばから六月の初にかけて出る螢の總數である。附近の人たちは、日の暮れるのを待構へて此の乏しい螢をつかまへに出る。悪戯いたづらざかりのでこ坊や茶目子はいふまでもなく、いゝ年をした者までが、手にく、笹の枝を持つて螢を追つて廻る。螢狩といふとまことに風流だけれど、實は、たまに飛出す一匹二匹の螢を七人も八人も人が奪ひ合ふのである。澤山の狼がたつた一匹の小羊を奪ひ合ふのと、其の狂暴さ殘忍さに於て少しも變るところはない。そして、結局は、
奪ひ合うて踏みつぶしたる螢かな
正己
の一句を現實に示すに過ぎない。

かうした悲劇が毎晩々々私の家の前で演ぜられるのだ。私はこのあさましい光景を見るたびに、つくづく螢捕る人たちの無風流と冷酷とを惡み、光ゆゑに、美ゆゑに、さなきだに短い命を更に縮められる此の蟲をかはいさうに思はずにはゐられない。
さて螢といふと誰しもすぐに火といふ事を想ひ出す。まことに螢は火とは離れ得ない縁でつながれてゐる。「ほたる」といふ言葉は火に縁のある言葉で、「火垂る」又は「火照る」などといふ意味から出たのだといふ。支那では螢の事を「夜光」「夜照」「流火」又は「自焰」などと稱へてゐるが、これらは何れも皆火に縁のある名である。

メキシコ
北アメリカ合衆國
の南にある共和國

では、螢といふ蟲は、皆光をもつてゐるかといふに、決してさうではない。我が國にも三十種ばかりの螢がゐるけれど、その中で光をもつてゐるのは十指を屈するにも足りない。その他は、螢とはいへ、光を持つてゐない。螢は我が國と支那とに限つて産する蟲であるかといふに、それもさうではない。ひろく他の國々にも産する。ことに熱帯地方に産する螢は、體も大きく、光も強くて、優に燈火の代用となる。昔メキシコの海岸に海賊が横行して、旅船をおびやかした時、旅船では、夜間燈火を消し、その代りに螢の火を使つて航海して、海賊の難を避けたといふ。又その昔の土人は、手や足の先に螢を結びつけて、燈火の代りとして夜道をしたり、螢を首飾として使つたりしたといふ。

守山
滋賀縣野洲郡守山町
野洲川の近く

車胤
晉代南平の人
數十匹の螢を絹製の囊に入れ、燈火に代用して讀書したといふ

我が國でも、現在、近江の守山地方では、夜道をするとき、一本の杖を持つて出て、道ばたの草をたゝき、その都度光る螢の明りで道を見わけて行くさうだ。その他、螢の火を燈火の代用とした有名な話としては、晉の車胤の故事がある。かやうに人々からもてはやされ重寶がられる螢は、一體どうして出来たものであらうかといふ段になると、大抵の人はだまつてしまふ。そして、例によつて偶發説を信ずる者が多い。尤も、螢が塵や芥からわくといふ事は昔から考へられてゐた事で、

五月雨に草の庵は朽つれども螢となるぞうれしか

匡房

平安朝の學者

大江匡房

天永二年(七七)卒

年七十一

草が腐つて

季夏ノ月、腐草化シ

テ螢トナル。(禮記)

りける

匡房

どの草の螢になるか見てゐたし

竺齋

などといふ歌や句がある。支那の學者なども草が腐つて螢となるものだと思ひこんでゐた。しかし「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺の通り、螢もこれを産む者がなければ、生れるものではない。

夏になると、螢の親は川邊の水際の草の根もとに黄いろい芥子粒ほどの卵を産む。此の卵は、夜になると親同様に光を放つ。そして、生れてから凡そ一箇月もすると、中から薄黒い小さな蛆が生れる。此の蛆は即ち螢の幼蟲である。そして、やはり尾の先に發光器を持つてゐて、何か刺戟を受

けると強い光を放つ。

此の蛆は、その年は蛆のまま、冬を越し、翌年の四月の末か五月の初に水際の土の中に潜りこんで、そこで皮を脱いで蛹になる。この蛹は約二週間で愈一人前の螢になつて飛出してくる。かやうに、螢の一生は凡そ一年だが、親螢の壽命は先づ三週間内外である。右に述べたやうに、螢の一生は光である。若し螢から光を除いたならば、一箇の醜い蟲として誰も顧みないに違ひない。それは、螢仲間でも光を持たないものは全く世に知られてゐないのである。光は實に螢の生命である。音もせでおもひにもゆる螢こそ鳴く蟲よりもあは

重之

平安朝の歌人
源重之
三十六歌仙の一
長保二年(六〇)卒

れなりけれ

重之

と歌はれるのも全く光ゆゑである。では、彼等は一晩中光り通してゐるかといふに、そんなわけではない。彼等が光り始めるのは先づ八時前後からである。それから夜が更けるに従つて段々にさかんになり、十時、十一時に至つて頂點に達する。十二時も過ぎ、一時、二時となると、彼等は活動をやめて草や木の葉の裏に隠れ、その光を収めて靜かに眠に就く。しかし、大抵の人は夜半までも螢を追ひまはすことはしない。先づ九時か、遅くとも十時には家に歸つて寢てしまふ。が、實はそれから後が螢の活動時間なのである。 丈草の

丈草

俳人
内藤丈草
蕉門十哲の一
尾張の犬山の人
寶永元年(三〇)歿
年四十二

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな

といふ句は、さすがに螢の習性を看破した名吟である。短い夏の夜も明けて、白い陽の光が川面を照らす頃、昨夜螢を追ひまはした川岸に立つて見ると、ゆうべあれ程ゐた螢はどこへ行つたのか、影も形も見えない。しかし、そのあたりの草や木の葉の裏をかへして見ると、昨夜の勇ましき、美しさに引きかへて、如何にも見榮えのしない、いぢらしい螢の姿を見るであらう。白日の下に引出された彼等は、實に醜い一箇の蟲けらなのである。螢の光が美といふ點から見ていかにも優雅なことは、こゝに説明するまでもない。しかし、螢は實に美の方面からば

かりでなく、科學的見地からも、亦貴重な光として學者の注意を惹いてゐる。

螢は親も光り、幼蟲も光り、又蛹も光る。して見れば、螢は一年中絶えぬ光をもつてゐる譯である。そののみか、凡そ螢が地球上に現れてから今日まで、乃至將來とても、一匹残らず地球上からその姿を隠す時が來ぬ限り、光の絶えることはない筈である。螢の光こそは眞に永劫の光である。(蟲)

一一 空の膝栗毛

鈴木文史朗

「お江戸日本橋七つ立ち……」——空の膝栗毛も日本橋から立つことにしようぢやないかと、機は中央線に沿つて進む。

鈴木文史朗

新聞記者

本名は文四郎

明治二十三年千葉縣

銚子町生

機

コメット旅客用飛行機

ハンケチ

Handkerchief

新宿

東京市四谷區新宿

オランダ

和蘭

Holland ヨーロッパ西部

の小國

後樂園

東京市小石川區小石

川町にある名苑

江戸時代に水戸徳川

家の經營したもの

國技館

本所區回向院にある

角力の常設館

ビルデング

Building

「武藏野の廣さに今更感服するね、まるで野の海だ。」なあに、武藏野ぢやない、關東平野だよ。——道理で筑波や秩父の連山が白雲のハンケチを振つてゐる。

新宿あたりへ來るまで、東京の郊外に赤瓦の屋根の多いのにあきれる。まるでオランダあたりの田舎の景色だ。

砲兵工廠内の後樂園の名苑も、上からは一つまみの草叢、國技館が坊やのシャッポ。

東京驛から丸の内一帯は、煉瓦石をならべたやう。ところどころ大きなビルデングが思ひだしたやうに突立つてゐるばかりで、總じて空から見た東京は、まだ震災後六年目が、

バラック

Barrack

ブロードウェイ

Broadway

五六日目と思はれるほどのバラックの海に見える。
 寫眞の眞中の橋が日本橋、左の大きな建物が三越とその附近。銀座、銀座と大騒ぎする東京のブロードウェイも、千五六百メートルの上から見ると、眞田紐か何ぞを伸ばしたやうで榮えない。人の影はなく、電車の走るのが高麗鼠ののたくるやうだ。お江戸の日本橋も、しやれでなく二本箸である。



日本橋の鳥瞰

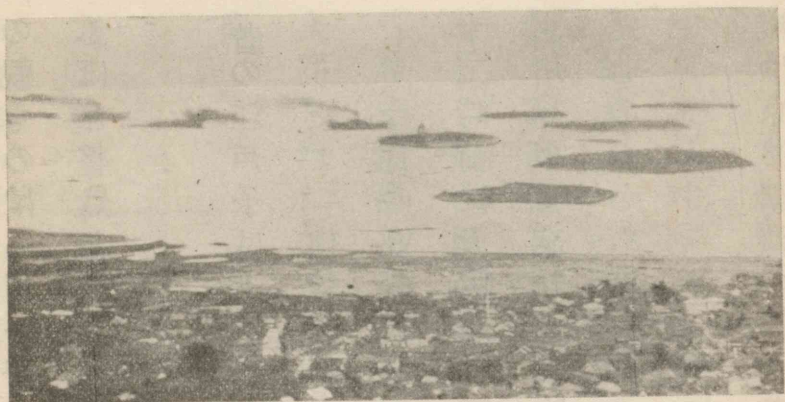
お臺場

品川灣にある舊砲臺
嘉永六年(五三)に築造

鐵道唱歌

大和田建樹の作

「汽笛」聲新橋を…
窓より近く品川の臺場も見えて波白き海のあなたに薄霞む山は上總か房州か…」



品川附近

おなじみのお臺場はまるで鯨の一群だ。品川の海にお臺場がなかつたら、紀州沖に鯨のみないよ
り寂しいだらう。お臺場は黒船退治の役に立たなくても、品海の盆石になり、火薬庫となり、鐵道唱歌に名を留め、今は飛行の標識となる。無用の有用、有用の無用の堂々回り。お臺場に次ぐ空から

の觀ものは品川一帶の埋立地。よくかうも埋立てたと思ふほど整然と埋立ててゐる。人間の地面慾は恐しい。

昔の江戸子は、上方道中に品川宿で早ひるをやつたものださうだよ。「僕等は日本橋からまだ五分と飛んでゐないぜ。」
「ぢや、今日の晝飯はどこかね」「お伊勢様の海の上さね」
十二時前に大阪着の豫定だ。

「品川へ来て忘れたる物ばかり。」——江戸町人は品川宿を引返しのつかぬ道中的一部分にかぞへてゐたものだが……。

機は京濱國道の眞上をつばくろのやうに一文字に飛んで

大森
東京市大森區大森
羽田
同蒲田區羽田

ボール

Boa d

彌次郎兵衛・北八
十返舎一九の著した
東海道中膝栗毛の主
人公

プロペラー
Propeller
推進機

ゆく。大森・羽田の海岸は、今を書入れの海水浴場が例により鳴物入りで、旗差物押立ててやつてゐるのが手に取るやうに見える。海岸はあいにく青い水と來ないから、ボール紙へ胡麻鹽をふりまいたやうに、多勢の者が水遊びをしてゐる。彌次郎兵衛・北八がこの飛行機にゐようものなら、こゝう、海を錢湯とは商賣往來にもあるめえ。「ねえことか……人間を海に大もり泳がせて……」とか何とかやりさうな人出。

港の雑音で騒がしいあの横濱の港も、機上から見ると晝休の田圃のやうにひつそりしてゐる。——實はプロペラーの

Mast
マスト

音で聞えないのだ。數へて見ると、二本マスト以上の汽船が二十七隻、これだけで可なり港はつまつて見える。五十隻の船はとても横濱へはいれない。これではいかん。――空を飛ぶと、どうも氣が大きくなる。

こゝで安房上總の山々を左に、三浦半島の根元を一またぎに大磯の上へ出る。五百メートルの低空に舞下つて敬意を表する。漁師の暑中休暇でもあるまいに、寄席の土間にぎつしり下駄をならべたやうに小舟が濱にあがつてゐる。大磯の上から弓なりに彎入した相模灣の岸傳ひに飛んでゆく。振返つて見ると、三浦半島の三崎邊が引きしぼつた

大磯
神奈川県相模國中郡大磯町

三崎
神奈川県相模國三浦郡三崎町

川奈崎

静岡県伊豆國田方郡伊東町の東南端

辻堂

神奈川県相模國高座郡藤澤町の内

茅ヶ崎

同茅ヶ崎町

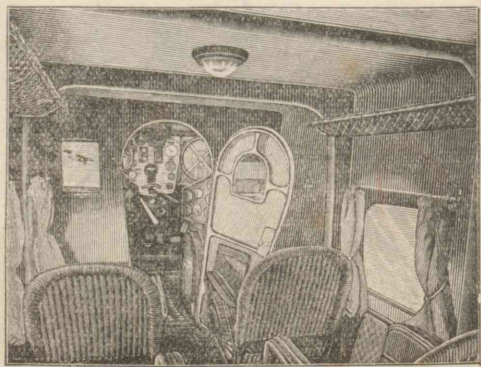
二宮

同中郡吾妻村二宮

江の島

同鎌倉郡川口村片瀬の海上に浮ぶ小島

弓弦の下のつけ根。他の一端は伊豆半島の川奈崎か。この満月形の弓に沿つて、辻堂茅ヶ崎二宮などの町々の屋根が、庭の小池のふちに咲いた松葉牡丹のやうにかはいゝ。江の島が海綿のやうに浮いてゐる。相模川を眞中に兩岸の平野が頼しく広い。なぜ頼しいつて？ いざとなつたらあの邊へ着陸……といふ見當がすぐつくもの――弱音のやうだが、正直なところ、これが素人乗客の實感だ。



旅客用飛行機の内部

箱根山

「箱根の山は天下の險
函谷關もものならず
萬丈の山千仞の谷」

ドア

Door

木下飛行士

木下耶摩次

四人

作者とその友人たる
H.K.の兩氏及び他の

一旅客

三人

作者とH.K.の兩氏

北原白秋

詩人

歌人

名は隆吉

明治十八年福岡縣生

こゝから機首は右に向ひ、愈箱根の山に差懸る。箱根山は飛行機にも、天下氣流の險……突然正面の操縦室のドアを木下飛行士が内からこつこつ叩く。あけると、彼の大きな手だけがによつきり出て紙片を渡した。四人が鼻を並べて見ると、山の氣流が烈しさうだぞ。揺れても驚くな。——おい、驚かすなよ。三人は思はず兩手で籐椅子の舷掛を握る。(空の旅地の旅)

一三 空中行進曲

北原白秋

天上の旅客、旅客、

我等は身輕し、鳥のごとし。

峨々たる山岳、原始の雪谿

なつかし、俯瞰し、樂し、樂し。

航路は輝く、空は涯なし。

飛べ、飛べ、飛行機、遮る物なし。

りらら、りら、りら、

りらら、りら、樂し、樂し。

天上の旅客、旅客、

氣流は新し、水のごとし。

緑の廣原、萬里の波濤、

遙けし、うつくし、樂し、樂し。

航路は輝く、空は涯なし。

飛べ、飛べ、飛行機遮る物なし。

らら、りら、りら、ら、

りら、らら、樂し、樂し。

天上の旅客、旅客

心は清けし、風のごとし。

眼下の虹の輪、とゞろく密雲、

幽けし、すさまじ、樂し、樂し。

航路は輝く、空は涯なし。

飛べ、飛べ、飛行機遮る物なし。

らら、りら、りら、ら、

りら、らら、樂し、樂し。

天上の旅客、旅客

星座は眞近し、街のごとし。

世界の建築、未來の人文、

目ざまし、あかるし、樂し、樂し。

航路は輝く、空は涯なし。

飛べ、飛べ、飛行機遮る物なし。

らら、りら、りら、ら、

りら、らら、樂し、樂し。 (青年日本の歌)

幸田露伴
文學者
名は成行
文學博士
慶應三年(三三七)江戸
生

一四 樂地

幸田露伴

如何なるところにも樂しきところはあるべし。又如何なるところにも樂しからぬところはあるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天のどかに霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒さに怯ゆる事もある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色無く、人畜共に萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとり

に罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく焼芋のあたゝかきに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。樂しきところ、樂しむべきところを見出し得ば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人はおのづからに勇氣を得て、苦中の苦に堪忍び、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなきまでも、人若し常に樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心もひろく、氣もゆたかになりて、おのづから人品もよろしくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうになるべし。されば人は努めて樂地を見出すべし、努めて樂地

碓氷
群馬縣碓氷郡桶川か
ら長野縣北佐久郡輕
井澤へ越す善光寺街
道の險阻

を見出す習慣を身に賦せんことを心がくべし。

昔江州の行商人と他國の行商人と、相共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日のおぶるが如く熱きに、商ふ品の嵩實に重かりければ、二人とも疲れ苦しみて憩ひけるが、苦しみの餘りに、江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくては、行商をやめて歸り去らんとしも思ふなり。と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむほどは我も亦苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず、此の碓氷の山を十ほども重ねたる高き山もあれかし。さら

ば數多き行商人は皆半途より身も疲れ心も弱りて歸り去るべし。其の時我一人如何にもして山の彼方へ到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」と言ひけりとなり。同じ苦艱の中に在りても、よく樂地を觀る者は、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人一境兩狀よく思ひ味はふべきなり。(洗心廣録)

一五 町人諭吉

太田正孝

私は、明治初年の先覺者福澤諭吉先生が自ら口にされたといふ「町人諭吉」といふ言葉を、大膽にも標題として掲げた。

諭吉
福澤諭吉
先覺者
教育家
慶應義塾の創立者
明治三十四年歿
年六十八
太田正孝
經濟學博士
衆議院議員
明治十九年静岡縣生

三田
東京市芝區三田二丁目

三田の聖ともいはるゝ人を、假初に「町人」と呼んだのではない。讀者よ、「町人」の文句に氣をわるくし給ふな。それは、彼の最も喜ぶ全人格を表現したものである。彼は、どこまでも市井の一野人として、その生を楽しんでゐたのである。

「町人」といふ語は、とかく卑しい言葉のやうに響く。それは、徳川末期の町人たちの無知と墮落とから出てゐる。謂はゆる「素町人」である。——賤しい。軽い。さげすまれる。——尤も一口に町人といふもののなかに、心の清い、ゆたかな男もある。男を賣らうとする「町奴」がそれだ。自由で、とらはれない。邪氣がない。廣い心持が宿つてゐる人たちであ

る。彼には、人爵などをそつちのけにした、原始のまゝの大自然のうちに生れついた心境がある。加賀様の前に呼出された俳人殿様も、武士も、こはくない。一茶は、



福澤 論 吉
「鶯や御前へ出て同じ聲」と、あつさり、やつてのけてゐる。それが本當の野人の心境である。正しい町人の心根である。

福澤先生は、その心を以ておし進まなければ、新日本を建設することは出来ないと思つてゐた。町人とはおれのやうな人間である。おれのやうな人間にして、はじめて「町人」と

一茶
俳人
小林彌太郎
信濃國柏原生
文政十年(三四七)歿
年六十五

名のり得る。彼は身を以てそれを示さうとしたのである。町人とは、人間らしい人間といふことである。社會人のことである。官位爵祿で飾り立てられたものではない。金錢的名譽で色どられたものではない。

今は昔、大阪の鴻池の門前を、毎日のやうに「はうろくや、はうろくや」と呼んでゆく男があつた。番頭さんは、この焙烙屋がいかにも勤勉で、かつ熱心なのに感心する。ある日、呼止める。「焙烙屋さん、お前も、いつまで、さういふ商賣をやつてゐても仕方があるまい。わしが主人に話してあげるから、どうだ、この家に御奉公する氣はないか」といふ。焙烙屋は、番頭さんの親切な言葉を喜んだ。が、誠に有難う存じます。

鴻池
大阪市東區今橋にあ
る舊家

何れ、わたしも落ちぶれましたら、他人様の御厄介になりませう」と、あつさり斷つてしまふ。「何れ、わたしも落ちぶれましたら——」といふところに、この焙烙屋の根性が出てゐる。本當の町人としての意氣が見えて嬉しい。

福澤先生は言ふ、

「苟も、わが身にかなふ仕事であつたら、進取一方と決斷して左右を顧みないことである。しかも、その中にたゞ一つ大切なことは、如何なる職業をとるにしても、獨立の大義を忘れることなく、君子の風を存して、大切なる場合に臨んで節を屈しないことである。」

と。獨立自尊の大義は、この精神から生れて來る。いはゆ

リンカーン

Lincoln
(1809—1865)
米國第十六代
の大統領

筆蹟
獨立自尊

る町人の本當の意味は、この言葉の中にはつきりと現れて
ゐる。リンカーンも、自由は人間の尊い權利である」と言つ

獨立自尊

福澤諭吉 筆

て、その市民を勵ました。福澤先生の標語と
する獨立自尊といふ言葉は、彼の一生を通し
ての魂の聲である。この意味に於て、獨立自
尊即ち町人精神といふことになる。
福澤先生は、學生に、かう説いてゐる。

「獨立自由の一義は、君等が讀書中にも、その
義を解し、先輩の言を聞いてもこれを悟り、
すべて塾中の空氣を呼吸して、自然に心に得たものもあ
るであらう。これは、學生として勉強してゐる間にも日

夜實行すべきことであつて、必ずしも後日になつて實行
すべきものではない。獨立自由とは、他人の厄介になら
ず、また他人に依頼することなくして、一身を處し、わが思
ふまゝにこの世を渡るといふ意味である。だから、塾に
あつて勉強してゐる間でも、その言行はすべて自分で事
の善し惡しを考へて人に交り、如何に他人に誘導勸告せ
られても、これに雷同してはならぬ。何でも自分の本心
に背かないやうにすべきである。
かうして見ると、本心に背かなかつた焙烙屋は、獨立自尊の
實行者である。彼にして、もし鴻池の使用人になつたなら、
生活の安きを得たであらう。が、それは、とりもなほさず、人

Type
タイプ

間としては落ちぶれたことになる。本心に背かないところ、町人としての面目がある。もとより、町人にも器の大小がある。力の大小もある。福澤諭吉先生こそは、實にその偉大なる町人のタイプである。(町人諭吉)

一六 三等の人

福澤諭吉

智愚強弱は様々にして、上智と下愚と、至強と至弱とを比較すれば、同じ人類とは思はれざる程の相違あれども、社會の經濟上より見るときは、概して之を三等に分つべし。不具廢疾の者は天然の不幸として之を除き、生來究竟の身體にてありながら、何等の才能もなく、唯安閑として飲食し、

甚だしきは放蕩無賴常に他人の厄介となるのみか、動もすれば、他を害して自分の慾を逞しうせんとする者あり。此等は最下等の人にして、社會全體の爲に謀れば、此の種類の者は有害無益、俗にいふ娑婆塞ぎの邪魔者なれば、一人にても其の數の減ずるこそめでたけれ。

一段を上りて、さまで人の世話にもならず、父母兄弟と共に衣食するのみにて、曾て戸外の事に關せず、間接にも直接にも人に教へたることなく、又相談に與りたることなく、一年に得たるものは一年に衣食し盡くして、老後死後の謀を爲すに違あらず、一軒の家を天地として生れて死するのみ。此の種類の人は一國の良民として決して邪魔者には非ざ

れども、社會・人事の盛衰には關係薄くして、此の世にありて大いに益するに非ず、無くて大いに不自由を覺ゆるに非ず、先づ以て中の部類なり。それより更に上りて、教育の結果又は天賦の才力を以て活潑に立働き、一身一家の獨立既に成りて、世間の累を爲さざる上に、尙一步を進めて、他人の相談相手となり、又社會の利害を案じ、自ら自身の地位・才力を顧みて、能く事に當るべきを信じて、或は私に商賣・工業を企て、或は公に政治上に關係し、或は地方の民利を謀り、或は宗教・教育の先導者となる等、一身の働を二分して、一は以て家に居り、一は以て世に處し、公私兩方のために力を盡くす者、これを最上等とす。

以上三種三等の區別は、必ずしも其の人の貧富・貴賤のみによらず、時に或は富貴にして厄介なる者あり、貧賤にして調法なる人物あり。その子細を審にして筆に記すは難き事なれども、事實は明白にして、世人の常に知る所なり。例へば、或人の死亡せしとき、一町村・一郡・一縣の人々之を傳聞して其の不幸を悲しむは人情の常なれども、之を悲しむと同時に、又、竊かに私語して、何某の病死、誠に氣の毒なれども、實は地方・遠近の爲に好き厄介拂なり。彼の親類・身寄にても先づ「安心ならん」など言はるゝ者は下等なり。病死の報知に接して會葬したれども、不幸の沙汰は其の日限りにして、翌日より語る者もなきは中等の人物なり。死亡を傳

へたる新聞の記事に驚くは勿論、病中より様々の噂に心配する折柄、いよ／＼不幸を聞きて、其の地の人々先づ之を悲しみ、尋いで之を惜しみ、此の人に去られては云々」とて泣く者あり、**狼狽**する者あり、數年の久しき、尙人の口の端に残りて消滅せざる者は上等なり。

されば、今、人が偶然にも此の世に生れ出でて、其の一身の行狀より居家處世の法に至るまでも、上等にするか、中等にするか、はた下等に陥るか、其の上中下の差別は、必ずしも學者先生に質問するを要せず、近く其の地の人心の向背を觀察して之を知るべし。「社會は良師なり」といふは、即ちこの事なるべし。〔福翁百話〕

槍ヶ嶽

飛騨信濃の國境に跨る日本アルプス中の最高峯
海拔三千百七十八米
芥川龍之介
文學者
東京生
昭和二年歿
年三十六

橡

七葉樹科の落葉喬木
高さ二三十米にもなる



一七 槍ヶ嶽へ

芥川龍之介

山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから何匹かの**獸**が走りだした。

「畜生！鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、**忌々**しさうに舌打をしながら、路ばたの**橡**の大木を見上げた。橡の若葉が重なり合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の小猿を連れた親猿が、靜かに私たちを見下してゐた。私は物珍しい眼をあげて、その三匹の猿の徐ろに梢を傳つて行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立去

蒸された峠の空氣は無氣味な靜寂を孕んでゐた。馬糞に
 たかつてゐる蛇目蝶と、**塵を煽**
 つて行く私と、それがこの急な
 路の上に生きて動いてゐるす
 べてであつた。

と思ふと、鈍い翅音がして、青黒
 い一匹の馬蠅が、べたりと私の
 手の甲にとまつた。さうして
 そこを鋭く刺した。私は一打
 にそれを打殺した。「自然は私
 に敵意を持つてゐる。」そんな**迷信**じみた心持が一層私を



梓川

梓川

長野縣南安曇郡槍ヶ
 嶽と常念岳との間か
 ら出る川
 下流は犀川といふ

山毛櫨

山毛櫨科の落葉喬木
 高さは二十七米にも
 なる



わくくさせた。私は痛む手を抱へながら、無理やりに足



り着いた。對岸には大なき**山毛櫨**や樅がうす暗く森々と

を早めだした。
 その日の午後、私たちは水の冷
 たい梓川の流を徒渉した。川
 を埋め残した森林の上には飛
 騾信濃境の山々が、殊にうす曇
 つた穂高嶽が、**嶄然**と私たちを
 見下してゐた。私は無愛想な

案内者の尻について、漸く對岸
 を蔽つてゐる熊笹の中へたど

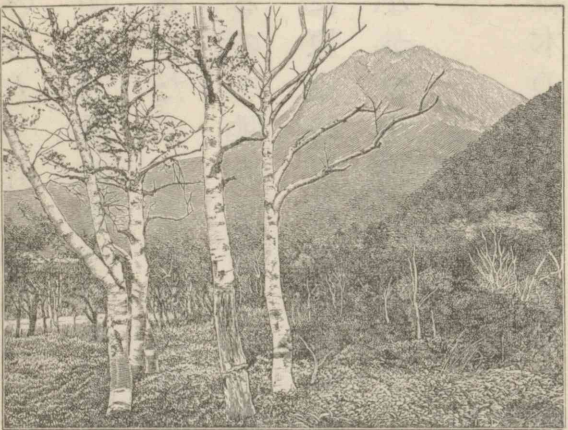
雁皮
瑞香科の落葉灌木
高さ一米半位
夏黄色い花が咲く



聳えてゐた。稀に熊笹が疎になると、雁皮らしい花の黄色く咲いた濕氣の多い草原の中に、放牧の牛馬の足跡が見えた。

程なく一軒の板葺の小屋が熊笹の中から現れて來た。案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ卸した。小屋の中には大きな圍爐裡が寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた長い釣竿を取卸してから、私一人を後に残して、夕飯の肴のために梓川の山魚を釣りに行つた。私は葎や雜囊を捨てて、暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると、熊笹の中から、大きな黒斑の牛が一匹のそく、側へやつて來た。私は稍、不安になつて、

白樺
殼斗科の落葉喬木
高さ十米餘
樹皮は白
葉は卵形



白樺の林

小屋の戸口へ退却した。牛は潤んだ眼をあげて、じつと私の顔を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり巻煙草に火をつけた。曇天の夕焼が消えかゝつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に刺して炙つた山魚を肴に、鍋で炊いた飯を貪り食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を卷いて作つた原

始的な燈火をともしながら、夜の帷が戸の外に下つた後も、いろ／＼山の事を話し合つた。白樺の火と櫓の火と、この明暗二種の火の光は、既に燈火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話のときれたときには、今更のやうに原始時代の日本民族の生活などを想像せずにはゐられなかつた。

雑木の重り合つたのを排いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者は私を顧みながら、「此處が赤澤です。」

といつた。私は烏打帽を阿彌陀にして、眼の前に開けた光景を眺めた。私の前に横たはるものは、立體の敷を盡くした大石であつた。それが狭い峡谷の急な斜面を満たしながら、空を劃つた峯々の向ふへ、目のとくかぎり連なつてゐた。もし形容の言葉をつければ、小さい私たち二人は、正に遠い山巔から漲り落ちる大石の洪水の上にあるのであつた。

私たちはこの大石の溢れた谷を「黄花駒の爪」の咲いてゐる谷を、蟲の這ふやうに登りだした。暫く苦しい歩みを續けた後、案内者は突然杖をあげて、私たちの左手に續いてゐる絶壁の上を指さしながら、



黄花駒の爪
黄色い花の咲く壺葎



嶽ヶ槍の夏初



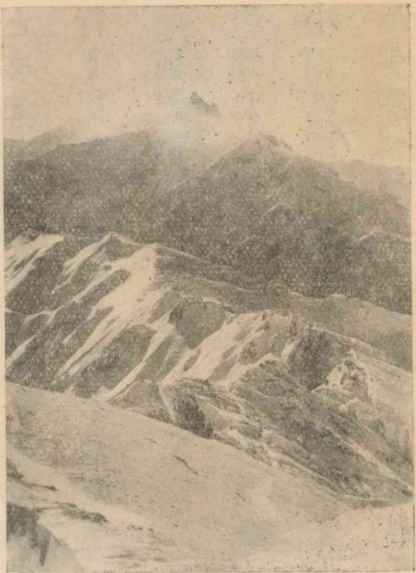
羚羊
鹿より小さく角には
枝がない

「御覽なさい。あすこに青猪がゐます。」
といった。私は彼の杖に沿うて視線を絶壁の上に投げた。
すると荒削りの山の肌が頂に近く偃松の暗い線をなすつ
た處に、一匹の獸が小さく見えた。それが青猪といふ異名
を負つた日本アルプスに棲む羚羊であつた。
やがてその日も暮れかゝる頃、私たちの周圍には、次第に残
雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた
寂しい偃松の群も見え始めた。私は時々大石の上に足を
止めて、何時か姿を露しだした槍ヶ嶽の絶巔を眺めやつた。
絶巔は大きな石鏃のやうに、夕焼の餘炎が消えかゝつた空
を、何時も黒々と切抜いてゐた。「山は自然の始にして又終

Ruskin
(1819--1900)
英國の文學者
美術批評家

ラスキン

なり。――私はその頂を眺める度にかういふ文語體の感想を必ず心に繰返した。それはたしか以前讀んだラスキンの中にある言葉であつた。



その内に、寒い霧の一團
槍が、もう暗くなつた谷の
下から、大石と偃松との
上を這つて、私たちの方
へ上つて來た。さうし
てそれがあたりを包む

と、小雨交りの風が俄に私たちの顔を吹きはじめた。私は
漸く山上の寒さを肌を感じながら、一分も早く今夜宿る無

雷鳥



九十九里濱

千葉縣の東海岸の砂

濱

北は下總の銚子町の南飯岡岬から南は上總の大東岬まで六町一里(約六百五十五米)にして九十九里あるといふ

徳富健次郎

文學者

號は蘆花

肥後國水俣生

昭和二年歿

年六十

人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の斜面を登つて行つた。が、ふと異様な聲に驚かされて思はず左右を見廻すと、あまり遠くない偃松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

小雨に濡れた案内者は強情な歩みを続けながら、無愛想にかう答へた。(うめうまうぐひす)

一八 九十九里濱

徳富健次郎

濶さ一町餘、長さ十六里半の此の夥しい砂濱は、人の子の生

大東
大東岬
千葉縣上總國夷隅郡大東村
飯岡の岬
千葉縣下總國海上郡飯岡町
ながらみ貝
きしやごの一種
中の肉を食べる
殻はおはじきに用ひる

砂ぶく
砂のぶく／＼とつもつてゐるところ

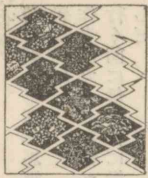
活の戦場で、同時に其の遊び場でもあります。風雨の中の舟の引揚げ、一時を争ふ漁舟の乗出し、地曳の網のあがりぎは、男は赤裸、女は眞顔で曳々聲を出す時は、自然を相手の戦争といふ感がひし／＼と人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歴々と見えて、空青々と、日麗かに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧の海の笑顔に愛嬌ばかりの白波を立つる日は、向ふの方でながらみ貝を搔く男も、赤裸で、子供の風呂桶ほどもある飯櫃引寄せ、立ちながら茶漬を食うてゐる赤銅造の仁王さまも、一張羅の晴着を汗にすまいとて、それを風呂敷に包んで負つて、紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舎娘も、街道の砂ぶく

賽の河原
冥途で子供の亡者が
石を拾つて塔を積む
といふところ

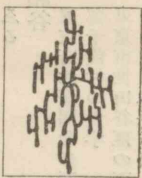
Canvas
帆布

に引換へてしつとりと弾力ある波打際の砂路を荷馬車挽
かして行く向鉢巻の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて
日がな一日のんきに網を繕うてゐる爺さんも、その子のお
もちやに小蟹をとると懸命に兩手で穴を掘つてゐるか
みさんも、人形のやうな兩手を舉げて家鴨の蹠のやうな兩
足でよちよち走つて来る三歳の女兒も、それらを見てゐる
私どもも、鬼がゐない賽の河原の砂遊をしてゐる一樣の子
供としか思はれません。まことに人生は嚴肅であります。
そして又快活であります。
此の砂濱は又大きなCanvasであります。色々のもの
が色々のものを描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに

松皮模様



朽木形



玉目形



任せてある此のCanvasの上に、勿論不朽とか無窮とか
は許されません。しかし、刹那のものにも人間の不朽より
めでたいものはあります。第一にめでたい波の手の跡を
御覽なさい。波は生きてゐます。活きた波の手の跡に、波
の氣分が顯れてゐないのはたゞの一筆だつてありません。
彼は好んで砂をしぐらに織ります。松皮模様を描きます。
鰐皮を作ります。朽木形。鉤をかけた玉目形。頗る意氣
な綾や縞も彼の手です。人の足跡。子供の足跡。轍の跡。
馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行くく描いたのです。
不具な楓の三本趾、鳥にしては大勝なのは鳥に違ひない。
ひよい、ひよい、ひよいとやゝしばらく續いて、何かに驚いて

龍の鬚

龍に似た草
人家の軒下などに植
ゑる

粕谷

東京府武蔵國北多摩
郡千歳村の大字
東京市世田谷區の西
北一軒ばかり
作者の居住地

伊香保

群馬縣上野國群馬郡
伊香保町
作者は九十九里濱へ
行く前に伊香保に遊
んだ

甘藍

Cabbage

ばつと飛立つたげであります。小さなく模様の、小刻みに右につゞいて左に折れ、また飜つてもとへ戻つてゐるのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡がありません。貝のあるいた跡があります。ある時、小さなく刷毛でばつばと描いたやうな織いく半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見てゐると、龍の鬚に似た小さな草が、そ知らぬ顔して、「私ぢやありません」と織い首を掉つてゐました。

九十九里に往つた最初は、七月といつてもしけがちで、此の大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、粕谷から持参の甘藍べん、豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食うてゐる日が續きました。そのうち二週もたつと、七月も半ばになつて鱈の地曳網が始まりました。私共が歸る頃には鱈も大きく、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海浴に行くころは、大抵もう曳始めてゐました。よく風いだ朝などは、地曳の組が、幾組もく南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見ゆる組、もう眼に入らぬほど遙かな杳かな組もあります。なるほど九十九里は大きな濱です。腰と踵に力を入れて、急がず、休まず、永劫につゞくかのやうにじわくく曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて來てからの活氣は、また見物であります。

小一町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つて来たかと思ふと、一方の列が綱を抱へながら、えつさ、えつさと他の一列の方へ走せ寄ります。鉢巻の赤裸男がざんぶと海に飛込んで綱元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾箇もく、並べられます。波打際では、其方曳け、此方しぼれと、綱主が罵りわめいてゐます。私共も砂の上から立ちあがつて、そろそろ波打際へ向ひます。もう綱は盡きて、繩綱が見えて來ました。向鉢巻、腰膚脱いだいゝ加減な婆さんかみさん娘までが、ざぶく、海に飛びこんでいつて、件の繩綱を攫んで、一抑一揚歌で拍子を取りながら曳張ります。名物の地曳歌がこれです。中でも年

配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつゞいて囃します。彼一句、此一句、歌つては曳き、曳いては歌ふ。抑へて、揚げて、俛くだんで、伸びて、右の片足ひよいと上げて、拍子も調子も面白く、綱は段々あがつて來る。一樣な節の間々に「何とか何とかやあい」と一齊に囃すときの面白さ。もう綱が見えて來ました。



九十九里濱の地曳網



網の繼目を全速で解く。海に潜つて網の囊をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよとわめく。一切の男女はぐるりと網に取りつき、何とか何する、何とか何せい、何とか何とかやあい。をやはり歌ひつゞけながら、網を手繰つては勿ね、しぼつては勿ね、段々囊の底へ魚を寄せて行きます。子供が撫網を持つてたかります。もう網の中は、さつきから鱈や鯖の青光り、白光りが、ばたく、ばたく、ごつたがへしてゐます。鱈の千五六百は入るやつさ籠が持つて來られて、一杯になると、向鉢卷、雙肌脱ぎの女たちが二人で籠の縁を攫んで、やつさ、やつさで濱へ持つて行きます。どうと置くこともあり、ぶつくりかへすこともあります。いやもう盛なことです。

ことです。

地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りました。

地曳すればわれも鷗と飛んで來つ魚獲んとして去りがてにする

拍子木が鳴ると、いそぐ飛んで濱に行き、獲物を手に入るまでにはうろついて立去らぬ私は、魚欲しさに地曳網の上を往つたり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさんたちに似寄つたものでした。(新春)

一九 我が幼時

新井白石

我が幼きころ、上野物語といふ草紙ありき。これは、寛永寺

みさご

かいつぶり



新井白石

學者

政治家

名は君美

享保十年(三六五)卒

年六十九

寛永寺

山號は東叡山

今上野公園にある

關東天台宗の總本山

父
新井與次右衛門正濟

の花見に、人の群がり來ることどもを記ししものなり。我が三歳なりし春の頃にや、火燧に足をさし、はらばひみて、その草紙を見ながら、筆紙をもとめて透寫ししけるを、母にておはせし人の見たまひ、十が中一二はまことの文字もあるを、我が父に見せまゐらせしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞傳へて、その寫ししものどもを取傳ふることになりたり。我が十六七歳のとき、上總國にゆきしに、あそこにて、その寫ししものを見ることを得たりき。又その頃、屏風に我が名を題せしに、二字はその體をなしたるもの、後までありしが、火に焼けうせたりければ、今はその頃のものは我が許には遺らず。

戸部
民部の別名
こゝは上總國久留里
侯土屋民部少輔利直
をさす
富田
通稱は小右衛門
後覺信と改めた



新井白石
東京帝室博物館藏
本摸據

この後は、常の戯に筆とりて物書く事のみ習ひければ、自ら日々に文字を見識りたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、たゞ往來物の類などを讀みならふのみなりき。戸部の家人に、富田とて、生國は加賀國の人と聞えしが、太平記の評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。夜々に我が父など寄りあひつゝ、その事を講ぜしめらる。我が四五歳の時に、毎にその座に侍りてこれを聽く

に、夜いたく更けぬれど、遂に座を去りしことなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどありしを、人々奇特の事なりといひき。

二歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解ききかせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じきかせたりき。「この兒文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など彼の人も言ひしかど、頑なる昔人たちの言ひしは、昔より言ひつたへし事あり。利根・氣根・黄金の三ことなくしては學匠になり難しといふなり。この兒利根こそ生れつきたらぬ、なほ幼くして、その氣根の事もはかり難く、

上松
通稱は忠兵衛
駿河國今川氏の家人
の後裔

家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。など言ひあへりしに、我が父も、戸部の御いつくしみによりて常に側を離れまゐらせず、學に入れ師に従はしめんこともかなふべからず。されど、をさなきより物書くことをば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書きならはしめたくこそ侍れ。とて、我が八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。

その冬の十一月半ば、戸部歸りまゐり給ひしかば、常に側に侍ふこともとの如く、明くる年の秋、また國にゆき給ひしあとにて、課を立てられて、日の中には行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書きいだすべしと命ぜられたり。冬に

至りぬれば、日短くなりて、課は未だ満たざるに日暮れんと
すること度々にて、西向なる竹縁のある上に机を持出でて、
業を終へぬることもありき。又夜に入りて手習ふに、睡の
催して堪へがたきに、我に附けられしものと竊かに謀りて、
水二桶づつかの竹縁に汲みおかせて、いたく睡の催しぬれ
ば、衣脱ぎすてて、先づ一桶の水を被りて、衣うち着て習ふに、
はじめ冷やかなるに目さむる心地すれど、暫し程経ぬれば
身暖になりて、またくねむくなりぬれば、また水をかぶる
こと先の事の如くす。二たび水をかぶりぬる程には、おほ
やうは課をも満てたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事
なり。

庭訓往來

一月から十二月に至
る漢文の書簡を集め
た書
玄慧法師の作と傳へ
られてゐる

かゝりしほどに、この頃よりは、我が父の人に贈りたまふ文
をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋また課を立て
られて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の中
に淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事
を終へしかば、冊になして戸部に見せまゐらす。褒め給ふ
こと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ
程の文ども、大方は我に命ぜられき。
また十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは、
太刀打の業にすぐれて人に教ふることありしを、我にもこ
の業教へられんことを望みしに、「わぬしいまだ幼し、これら
の業學ばんことなほ早し」といふ。「さこそ侍るべけれど、太

歳十六になりしもの
神戸といふもの二
男

若侍
長谷川といふもの
翁問答
五卷
中江藤樹著
儒教の大意を老翁の
物語に託して假名書
きにしたもの

刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと誠に不用の事にや」といひしかば、「のたまふ所誠にしかなり」とて、一つの業を傳へて習はしめたり。かゝりし程に、その歳十六になりしものの、我と藝を試みんといひしかば、太刀を取りて、三度あひて三度まで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。その後は常にかゝる武藝の事どもを好みしかど、物讀むことをも好みければ、常に我が國の物語・草紙の類をば見ずといふものもなかりき。十七歳の時に至りて、同じやうに召使はれし若侍の許にゆきしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。如何なる事をか記しぬらんと思ひて、借ることを得て、家に

京の人
江馬益庵
名は玄牧

小學

六卷
宋の朱熹等撰
支那古來の嘉言善行
をあつめ記したもの
程子の四箴
宋の程頤の作つた視

聽言動の四箴
四書

大學
中庸
論語
孟子
五經
易經
詩經
書經
禮記
春秋
韻會
漢字典の名
元の熊忠の撰
字彙
漢字典の名
明の梅膺祚の撰

携へ歸りて見けるにこそ、始めて聖人の道といふものあることをば知りけれ。これより、道に志切なりけれど、師とすべき人もあらず。京の人にて醫を業とし、少し學問あるが、戸部の許に日々來れるあり。この人に向ひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じきかせられたり。その後、又程子の四箴をも講じきかせられしより、やがて、小學の書を日夜に誦し習ひて、業既に畢りぬれば、四書を誦し習ひ、その後また五經をも誦し習ひたれど、此等皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會・字彙等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに僻事のみぞ多かりける。(折焚く柴の記)

永田秀次郎

政治家
貴族院議員
東京市長
號は青嵐
明治九年兵庫縣生
ハバロフスク

ウスリー江の黒
龍江に會する處

ブラゴエシチェンスク

Blagovestchensk
黒龍江の中流に
ある都會

フレデリック大帝

Frederick the Great
(1712—1786)
プロシヤを興
した名君

ウィルヘルム一世

Wilhelm I
(1797—1888)
獨逸皇帝
獨逸統一の英
主

ビスマルク

Bismarck
(1815—1898)
獨逸の大政治
家
ウィルヘルム
一世の宰相

モルトケ

Moltke
(1848—1916)
プロシヤの元
帥
普佛戰爭當時
の參謀總長

チャガルテン

Ziergarten
オペラ

二〇 繪葉書通信

永田秀次郎

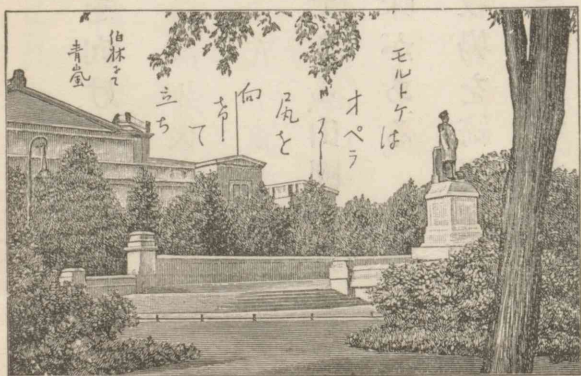
天の川

汽車は黒龍江の上流に向つてひた走りに走つて行く。ハバロフスクを過ぎて約十九時間、午後三時頃にブラゴエシチェンスク附近を通過した。これから先は折々山のやうな岡のやうな處が多くなつて来る。午後九時頃或山手の驛に着いた時に、白樺の幹が白々と立つ高原の上に、澄みきつた銀河が流れてゐた。

白かばの空に色濃し天の川

銅像の都

伯林はなるほど銅像の都だ。行く先々に銅像が立つてゐる。フレデリック大帝、ウィルヘルム一世、ビスマルク公、モルトケ將軍と應接に違ないほどである。英雄崇拜といふよりは銅像崇拜である。こんなに強制されては銅像もさほど有難くない。鳩の糞が白くビスマルクの顔を流れてゐたのを見た。チャガルテンを通りぬけた時に、オペラの



モルトケ將軍銅像

横に立つてゐるモルトケの眞面目な顔をした銅像を見た。

モルトケはオペラにしりを向けて立ち

牛の鈴

この國の首府ベルンは熊の義である、山國の雄であるといふのであるが、とにかく俳味がある。全體スウイスの人は勤勉で、儉約で、田野や牧場を綺麗に手入れをして、家屋なども小ざつぱりした住宅である。そして家のすぐ近くからが多く牧場になつてゐて、頭に大きな鈴を着けた牛が秋晴れの斜面の花野を歩いてゐる

この國
スウイス
ベルン
Bern
Swiss
瑞西

様子は、いかにも太平を表象する心地がある。

秋高し雲おだやかに牛の鈴

とにかくスウイスは僕にとつては好きな國である。

ヴェニス

Venice
ヴェニス

ヴェニスは十五世紀の頃は世界通商の中心地として地中海を支配したが、今日は人口五十萬の一市として古き寺院や古き家屋などに昔の名残を留めて、懐古の情に堪へないものがある。僕はまづ有名なピエ、サン、マルコの廣場に行つて見た。これを圍むゴシック式の高い建物は全部大理石である。八時半から音楽が

ピエ、サン、マルコ
Pie San
Malco
ゴシック式
Gothic
Architecture

Hotel ホテル

寺

ピエ、サン、マルコ

Gondola ゴンドラ

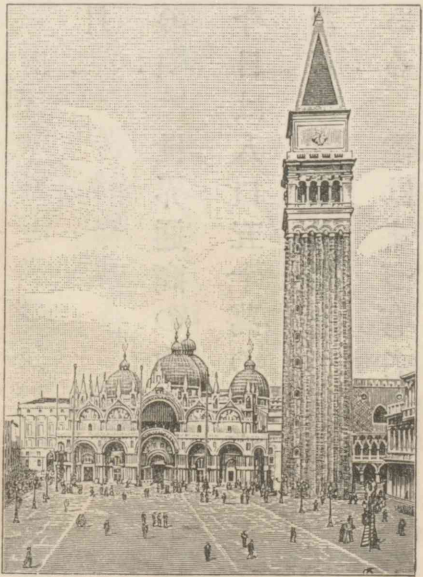
Gondola

始るといふので、僕は一旦ホテルに歸つて、八時前から又出かけた。折から白い月がこの水の都を隈なく照らして、空は鏡の如く澄みきつてゐる。後の月ヴェニス

の町の空細し僕は更に寺の廣場に沿うて海岸に出た。

ゴンドラの月に躍れるへさきかな

散歩してゐて如何にも氣持のよいのは自動車のない事である。



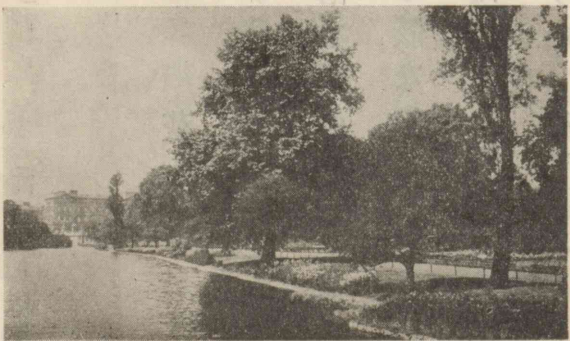
場廣の科尔マンサ

St. James Park

セント、ゼームス、パーク

自動車のなき町うれし月を踏む

其倫敦の家屋は古びたものが多い。比較的新しいものでも何となく煤けてゐる。その古いものの煤け方といつたら、まるで眞黒である。如何にも保守的のほひがある。或夜セント、ゼームス、パークを散歩してゐると、恰も中秋の明月が森の上に浮んで出たのを見



クーバスムーゼトンセ

た。流石の倫敦も明月だけは煤けてゐなかつた。

(高所より見る)

荻原井泉水

俳人

名は藤吉

明治十七年東京生

二 蚊

荻原井泉水

顔を洗つてきて、机の前に坐ると、ゆうべ書きさしたまゝに置いてある原稿紙の上に、ごみが落ちてゐた、指で弾かうとして、目をとめて見ると、一匹の蚊の骸なのだ。脚を縮めて、其の脚先を合はせて、尾花の散つたやうな形をして死んでゐる。生れて間もない蚊であらう、からだも弱々しく、其の色も黒いといふよりも、薄墨色をして、殊にその瘦せやうは——生れてから血を吸つた事がないかのやうである。此

此の山上

和歌山縣紀伊國高野山の僧院

の山上は、八月の末でも曉方になると一寸冷えるが、飢ゑきつてゐる爲に、そのちよつとした寒さにも堪へられずに死んだものと見える。

ふと氣がつくと——私の左手の拇指に、一匹の蚊がとまつてゐる。是も實に瘦せた蚊だ。今にも飢の爲に死んでしまひさうで、漸く生きてゐるといふ風である、鳴く聲などは出さうもない、いや、血を吸上げる力なども、とても有りさうにもない。それでも彼は私から血を吸はうとする意志があるらしい。私は、彼がそれを能くするかどうか、彼を驚かさぬやうに、指をじつとして、見守つてゐた。

彼は其の細い嘴を私の皮膚の中に差込まうとする、滿身に

エネルギー
Energy

其の力——或エネルギーが残つてゐるのが不思議である——をこめる爲であらう、瘦せた、へなくとした脚を一生懸命に踏んばるのだが、其の脚は私の指の根元に生えてゐる毛よりも細い、而して其の右の脚の一つは關節の所からもげてゐる。彼はちんばなのである。茶色をした彼の胴體は、べしやんこに萎びて、其の上に灰色の薄い翅を重ねて居る。小さな胸がある、それに續いて、猶小さな、一つの黒い點に過ぎない顔がある、其の顔から長い嘴が出てゐる、茶色で、先だけが黒い。彼はともかく、飢ゑたものの眞剣さで、私から血を得ようとしてゐるのだ。私は痛くも痒くもないが……。

Metreglass
メートルグラス

と、彼のべしやんこな胴の底に一點の赤い物が見えて來た。彼はたしかに血を吸ひはじめたのだ。彼は始めて食にありついて嬉しいのであるか、或は猶力を入れようとする爲であるか、脚を舉げて、少し動かしては、踏んばりかへるのである。胴の中の赤い物は、底からだん／＼に増してゆく、胴には横に輪をなしたすぢがあるので、丁度メートルグラスに葡萄酒をついでゐるやうである。彼の胴はもうべしやんこではない、ふつくりと赤く膨れてしまつた、小さい胸を通して顔まで細い線が——それが食道であらう——其處まで赤く見透かされる。彼は満腹以上に足りてしまつたに違ひない。さて彼はどうするであらうか。彼は漸く嘴

をぬいた。それを上にむけて、ほつと大きく息でも吐く風である。飛ばうとはしない、脚をかはるゝに舉げて、ゆらゆらと振廻すやうな風をする。彼は腹一杯になりすぎて、身が重くて、急には飛べないのだと見える。いや、彼は旨い酒に酔ひすぎて、獨り陶然として佳い氣持になつてゐるかのやうである。ともかく、先程まで、あれ程に痩せて貧相であつた彼が、今は如何に肥えた、若々しい蚊になつた事であらう。彼は望むところの物を得て、すつかり飽足りたといふ形である。又、私に見られてゐることも知らずに、すつかり安心してゐるらしい。

彼の酔つた顔をもつと好く見てやらうと、私は朝日の光の

中に、彼をとめたまゝの指を差出した。それでも彼はまだ飛去らうとはしない。彼の胴體を光に透かして見ると、其の血のあざやかな、而して其の澄んだ赤さは、全く葡萄酒である。いや、私はこれほどに美しい色をした葡萄酒を嘗て見たことがない。而して是が私の血であるのか——私は瘻をした時に流れる自分の血を幾度も見たが——これほどに鮮かに、これほどに澄んだ赤さの美しい自分の血を嘗て見た事がないのである。(山川行佳)

二二 烏賊釣舟

相馬御風

秋の氣が動きはじめる頃から、海も亦著しくその趣を變へ

相馬御風
文學者
名は昌治
明治十六年新潟縣糸
魚川町生

先川集
卷第十六
文庫

て来る。夜の浪の地をうつ音の枕べにひびくにも知る秋の
來たるを

八月の下旬になると、不思議にも、浪の音に秋らしい感じが
そはつて来る。水の色が紺碧が、日にくく黒みを増して行
く。波のうねりが、妙にせましく、荒々しくなり、磯に打
ちつける工合も、何となくいつこくになる。漁師たちは、さ
ういふ波の打ちかたを見て、あゝもう秋の波が立つて来た。
といふ。漁船の遭難の最も多いのも、その頃からである。暴風浪に
遭つて漁船の難破した悲惨な光景や、それにまつはる悲し

い話を、私たちは、過去に於て、どれほど多く見たり聞いたり
したかわからない。私たちの地方で、初秋の暴風浪の難に
遭ふのは、烏賊釣舟である。烏賊釣舟の出るのは、おもに六
月から九月までの間で、しかも、それは夜間に於てである。
眞夏の夜の風いだ、海に、點々たる漁火が水平線を取りま
いてゐるのを、涼しい風の吹く海岸で眺めるのは、まことに美
しい。能登の山に沈んだ夕日の餘光に、見渡すかぎり金色
に輝いてゐる海面を、涼しい夕風を帆に受けながら、滑るや
うに沖へくと出て行く烏賊釣舟の群を眺めるのも、たま
らなく快い。けれども、いよく秋の波が立ちはじめ、い
つ思ひがけない大荒れが来るかわからないやうな夕暮に

乗りだして行く烏賊釣舟の何となく寂しさうな姿や、その舟の小さくなるまで波際に立つて見送つてゐる漁師たちの妻や子供の不安さうな様子を見るのは、いひやうもなく哀れなものである。

暗いさびしい

夜の沖

烏賊釣舟の

灯が見える。

どれがおうちの

舟だらう。

幾つもく

灯が見える。

うちの父さん、

眞夏でも

沖は寒いと

いつてゐた。

時々波に

かくれては、

ちらく舟の



烏 賊 釣 舟

灯が見える。

漁師の子供たちのかういふ心持を察して見たりして、私たちも、時々夜の沖に波のまにまに明滅する漁火を眺めて、妙に涙ぐましくなることがある。

沖邊なる烏賊釣舟のいさり火を夜ごとにわれの数へては見る

よもすがら働く身にはしのゝめの光いかばかり嬉しからまし

夜中沖で働いた疲にもまけずに、元氣よく艫を押しながら、まだ日の出ない曙の海を漕歸つて来る漁師たちの心もち、は、どんなにすがすがしいことであらう。

秋の波のやゝたちそめし沖邊より烏賊釣舟はけさもかへり來

まつたく「けさもかへり來」である。「あゝ、今朝も無事に歸つて来てくれた。」かういふ安心は、恐らく、秋風が吹きはじめの頃から、毎朝漁師の妻たちの感じないではゐられぬところであらう。此の「今朝も今朝も」の安心にひかれて、彼の女たちは、どんな危険が隠されてゐるかわからぬ夜の海へ、夫の乗る舟を毎夜送り出してゐるのである。(愚庵和尚その他)

二三 氷川清話

勝海舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。

勝海舟
政治家
名は安芳
舊幕臣
海軍卿
樞密顧問官
伯爵
明治三十二年薨
年七十七

さあ、何でも来い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて来るものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうか、かうせうかと躊躇するやうになつては、もういかぬ。若し一度で出来なければ、何度でも出来る所までやり通す。とかく世間の人は、事業の成就する前に、根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出来ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて、知



勝海舟

西郷南洲
明治維新の元勳
名は隆盛
参議
陸軍大將
明治十年戦歿
年五十二
筆蹟
戊辰三月官軍の先鋒
品川に至る十五日を
期して侵撃の令あり
と同日書を送り先鋒
参謀に送り一見を希
ふ余高輪薩摩の邸に
到る

己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が来て、これまで敵視してゐた人の中にも、互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出来るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。

そこに行くくと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。

戊辰三月官軍先鋒品川に至る十五日を期して侵撃の令ありと同日書を送り先鋒参謀に送り一見を希ふ余高輪薩摩の邸に到る

勝海舟 筆蹟

高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全

筆蹟

尊翰拜誦仕候陳ば唯
今田町迄御來駕成し
下され候段御知らせ
下され早速罷出候様
仕るべく候間何卒御
待居下され度此の旨
御受迄此の如くに御
座候頓首
三月十四日
西郷吉之助
安房守様
拜復

手紙の筆蹟
お房守様
お返事
お礼

西 南 南 西
七 友 帖 書 翰

市鎮撫の大任まで一切自分
に任せて、少しも疑はぬ。昨
日まで敵味方であつたとい
ふことは何處へか忘れてし
まつたやうだ。其の度胸の
大きいのには、自分もほとほ
と感心した。
官軍が品川まで押寄せて來
て、いまにも江戸城へ攻入ら
うとする際に、西郷は自分が
出した唯一本の手紙で、芝田

町の薩摩屋敷までその談判にやつて來た。當日、自分は羽
織袴で馬に騎つて、従者を一人連れたのみで出掛けた。



E. Chisjone

西 南 南 西
キ ヲ ソ ネ 筆 洲

まづ一室へ案内されて
暫く待つてゐると、西郷
は庭の方から、古洋服に
薩摩風の下駄をはいて、
例の熊次郎といふ忠僕
を従へ、平氣な顔で出て
來た。「これは遅刻しま
して、誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子
は、少しも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。

さて愈談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挟まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」と、かういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出来、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、いや貴様のいふ事は自家撞着だ」とか、言行不一致だ」とか、澤山の暴徒があつた通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。とか、色々喧しく責立てるに違ひない。さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し、西郷は流石にそんな野暮は言はない。よく大局を達観する明と、大事に處する斷とをもつてゐた。

桐野
桐野利秋
鹿兒島の人
西南役の勇將
明治十年城山に討死
した

談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ来て、竊かに様子を覗つてゐる。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし〜と詰めかけてゐる。實に殺氣陰々として、物凄い程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものの如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集してゐた兵隊はどつと一時に押寄せ、來たが、自分が西郷に送られて立つてゐるのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣に接するだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座

を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいこととは、いはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。外國の事情などは自分が話して聞かせた位で、或事柄の知識は自分の方が上であつたかも知れぬが、その氣膽の大きいことに至つては、眞に絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。(永川清話)

二四 南洲遺訓 西郷南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、作略を用ひて一

且その差支を通せば、後は時宜次第工夫の出来る様に思へ



筆蹟
天ヲ敬シ人ヲ愛ス。
南洲書

西郷南洲筆

ども、作略の煩屹度生じ事必ず敗るゝものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なる様なれども、さきに行けば成功は早きものなり。道は天地自然のものにして、人はこれを行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋

ぬべし。己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛せぬものなり。

過を改むるに、自ら過つたとさへ思ひつかば、それにてよし、その事をば棄てて顧みず、直に一步踏出すべし。過を悔しく思ひ、取繕はんと心配するは、譬へば茶碗をわり、その破片を集め合はせ見るも同じにて、詮もなきことなり。命もいらす、名もいらす、地位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國

家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は、天下舉つて毀るとも足らずとせず、天下舉つて譽むとも足れりとせず。自ら信ずること篤きがゆゑなり。

天下後世までも信仰悦服せらるゝものは、只是、一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。(南洲遺訓)

曾我兄弟
十郎祐成
五郎時致

新國文讀本 卷三終

ふん入るふん入る... (Faint vertical text columns, likely bleed-through from the reverse side)

新國文讀本 卷三

文部省檢定

昭和八年一月十三日 中華學校國語教科用
昭和八年七月三十日 實業學校國語教科用

昭和七年八月二十二日 印刷
昭和七年八月二十五日 發行
昭和八年一月二十二日 修正再版印刷
昭和八年一月二十五日 修正再版發行



編者 發行者 發行所 印刷者

東京市小石川區高田老松町五二番地

吉田彌平

東京市神田區神保町一丁目五番地

上原才一郎

東京市神田區神保町一丁目五番地

光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
振替口座東京三二七番

東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地

株式會社 秀英舍

根本力三

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

SHUDO

勢
力

力



二ノ二 小林乙二